

クリスチャンの行動規範 第一ペテロ 2 章 11-25 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

<https://ichthys.com/Pet34.htm> からの翻訳

(11) 愛する者たちよ。私は、この[地上における]寄留者、また一時的な滞在者であるあなたがたに勧める。あなたがたの[まさに]命に対して戦いを挑んでいる肉の欲望を避けなさい。(12) 異邦人(すなわち、不信者)の中で、あなたがたの生活のあり方を[道徳的に]良いものに保ちなさい。それは、彼らがあなたがたを悪を行う者としてそしっていても、あなたがたの良い行い(すなわち、生活と実を結ぶ働き)を目にする時、訪れの日には神に栄光を帰するようになるためである。(13) 主のゆえに、人間によって立てられたあらゆる権威に従いなさい。主権者である王にであれ、(14) また、悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるために、王を通して遣わされている[ほかの]統治者たちにであれ、従いなさい。(15) なぜなら、善を行うことによって愚かな人々の無知な言葉を封じること、これが神の御心だからである。(16) 自由な者として[生き]なさい。しかし、その自由を悪を覆い隠すための口実として用いるのではなく、神のしもべとして[生き]なさい。(17) すべての人を敬い、[信者たちからなる]兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。(18) しもべたちよ、十分な敬意をもって主人に従いなさい。善良で道理をわきまえた主人にだけでなく、不公平な主人にも従いなさい。(19) なぜなら、神に対する[清い]良心のゆえに、不当に苦しめられて苦難を受けても耐え忍ぶなら、それは[神の御前に]喜ばれることだからである。(20) しかし、罪を犯したために罰を受け、それを耐え忍んだからといって、何の誉れがあるだろうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。(21) 実に、あなたがたが召されたのは、このためである(すなわち、キリストの苦しみにあずかるためである)。キリストもまた、あなたがたのために死なれ、あなたがたがその足跡に従うように模範を残されたからである。(22) 「彼は罪を犯さず、その口には何の欺きも見いだされなかった」([イザヤ 53 章 9 節後半](#))。(23) キリストは、そしられても、そしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にご自身をゆだねられた。(24) キリストご自身が、木の上で、その身に私たちの罪を負われた。それは、私たちが罪に対して死に、義のために生きるためである。その傷によって、あなたがたはいやされた。(25) あなたがたは、かつて迷い出た羊のようであったが、今は、あなたがたの命の羊飼いであり監督者である方のもとに立ち返ったのである。([第一ペテロ 2 章 11-25 節](#))

序論：

第二章の前半で、ペテロは救われた後のクリスチャン生活を説明するために、三つのたとえを示しました。乳を飲むことは、霊的成長のために真理を取り入れることに相当し、岩の上に家を建てることは、イエス・キリストとの関係において霊的に前進していくことに相当し、そして、私たちがその一員とされた王なる祭司職は、私たち全員が召されている、主のために霊的な実を結ぶ働きを表しています。このように、救われた後にすべての信者の前にある課題と機会の要点をまとめたうえで、ペテロはここから、クリスチャンとしての生き方という戦いを戦うために必要となる、数多くの実際的な教えを与えていきます。11 節から 25 節は、要するに、イエス・キリストに栄光を帰そうとするすべての信者が従って生きるべき行動規範であり、ペテロはこの規範を、あらゆる模範の中で最高の模範、すなわち私たちの愛する救い主が地上で歩まれた生涯に基づかせています。

【この地上における】寄留者、また一時的な滞在者(11 節)：

愛する者たちよ。私は、この【地上における】寄留者、また一時的な滞在者であるあなたがたに勧める。あなたがたの【まさに】命に対して戦いを挑んでいる肉の欲望を避けなさい。(第一ペテロ 2 章 11 節)

クリスチャンとしてこの世とこの人生に対する基本的な姿勢を正しく保つためには、そのどちらも一時的なものであることを認識しておくことが絶対に不可欠です。私たちはここにほんの短い間しかいません。この墮落した世に、私たちの永遠の住まいはありません。また、この朽ちる体も私たちの最終的な状態ではありません。私たちは永遠の体(第二コリント 5 章 1 節)と、「その設計者また建設者は神である」永遠の住まい(ヘブル 11 章 10 節)を待ち望んでいます。私たちはこの世に何一つ持って来ませんでし、何一つ持って出ることありません(第一テモテ 6 章 7 節)——ただし、霊的に成長し、前進し、イエス・キリストの教会のために実を結ぶことによって得る報いは別です。

私たちは本当に、この地上では寄留者にすぎません(第一ペテロ 1 章 1 節)。アブラハムと族長たちが天幕に住んだように、私たちもこの一時的な血肉の「天幕」に住みながら、私たちの祝福された希望(テトス 2 章 13 節)、すなわち私たちの主が現れてくださることを熱心に待ち望んでいます。その時、この朽ちる器は変えられ(第一コリント 15 章 51-54 節; 第二コリント 5 章 1-8 節)、私たちはいつまでも主と共にいることになり(第一テサロニケ 4 章 17 節)、主をありのままに見て、私たちもまた主と同じような者

となるのです([第一ヨハネ 3 章 2 節](#))。この重要な原則を忘れてしまうと、その結果、この世とあまりにも親しくなり、この世を楽しもうとし、この世と友になろうとするようになって、問題に陥ることがあります([詩篇 90 篇 9-12 節](#); [第一コリント 7 章 29-31 節](#)参照)。

姦淫を犯す不貞な者たちよ！ この世との友情が神に対する敵意であることを知らないのか。この世の友になろうとする者は、自らを神の敵とするのである。([ヤコブ 4 章 4 節](#))

(15) この世を愛する者となってはならない。また、この世にあるものを愛してはならない。もしだれかがこの世を愛する者であるなら、父に対する[真の]愛はその人のうちにはない。(16) なぜなら、すべてこの世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、そして人生についての誇り高ぶりは、父から出たものではなく、この世から出たものだからである。(17) この世とその欲は過ぎ去っていく。しかし、神の御心を行う者は、永遠に[神と共に生き]続けるのである。([第一ヨハネ 2 章 15-17 節](#))

あなたがたの[まさに]命に対して戦いを挑んでいる肉の欲望(11 節)：

愛する者たちよ。私は、この[地上における]寄留者、また一時的な滞在者であるあなたがたに勧める。あなたがたの[まさに]命に対して戦いを挑んでいる肉の欲望を避けなさい。([第一ペテロ 2 章 11 節](#))

これらの言葉は、罪との戦いにおいて私たちすべてにとって大きな助けとなるはずです——なぜなら、この問題が絶対的に重要であることを私たちに強く認識させてくれるからです。結局のところ、「聖別なしには、だれも主を見ることはない」のです([ヘブル 12 章 14 節](#))。これまで見てきたように、聖別とは罪と悪から分離されることであり、救いの時にはキリストにあつて立場上のものとして与えられ、復活の時には、もはや罪を犯すことができなくなることによって最終的なものとなります。その間にある「経験的聖別」には、誘惑を退けるために信者が一瞬一瞬、決断を下す必要があります。私たちが罪に抵抗する意志を持つ時、御霊はそうするために常にそばにいて助けてくださいます(例えば、[ガラテヤ 5 章 16-25 節](#); [ヤコブ 4 章 5-6 節](#))。抵抗することに失敗すると、主との交わりから外れることになり、主のもとに立ち返り、告白を通して赦しを求める必要があります([詩篇 32 篇 5 節](#); [第一ヨハネ 1 章 9 節](#))。立ち返って告白することを怠り続ければ、時間の経過とともに、私たちの霊的な前進の勢いは著しく損なわれ、最も極端な場合には、背教(最終的に完全にこの世へと立ち返り、主を捨てる者の場合)や、死に至る罪(主を手放すことは拒みながら、同時に罪の生活を捨てることも拒む者

の場合)にまで至ることがあります。¹

だからこそ、「聖別なし」では、私たちの救いさえ危険にさらされる可能性があるのです。したがって、ここでペテロが述べている「私たちの命に対して戦いを挑んでいる肉の欲望」という言葉は、最大限に真剣に受け止めなければなりません。というのも、「単に」私たちの肉体の命について語っているのであれ(死に至る罪によってこの世から召され、その後に得ることのできたはずの報いを失う信者の場合)、救いそのものを失うことについて語っているのであれ(最終的に、以前持っていた主への信仰を捨て、罪とこの世を選ぶ者の場合)、どちらにしても、これ以上に重大なことはないからです。さらに、肉的な状態と霊的な状態との間を絶えず行き来している人には、大きな霊的前進に対して厳しい限界が設けられることも考慮すべきです。すべての人は罪を犯します(例えば、[ローマ 3 章 23 節](#))。しかし、成長している信者、成熟した信者は、罪を犯すことが次第に少なくなり、その罪も次第に重大でないものになっていきます(もちろん、すべての罪が重大でないという意味ではありません。しかし、ポルネイア porneia[性的な不品行]を実際に行うことが、高慢な思いを抱くことより明らかに悪いことは確かです)。そして、まず何よりも自分の体を、次に自分の舌を、そして最後に自分の思いを、ある程度適切に制御できるところまで達しない限り、本格的な霊的前進は、よくても進んだり後退したりする不安定なものになってしまいます。ですから、クリスチャンの行動について扱うこの箇所の導入において、ペテロは非常に明白で不可欠な原則から始めています。すなわち、基本的な防御は、あらゆる効果的な攻勢に必要な土台であるということです。

これは、戦争において「警戒(security)」と呼ばれる原則と比較することができます。この原則は、こちらが主として攻勢に集中している時であっても、敵から攻撃を受ける可能性に備えて、慎重かつ適切な準備を怠らないことを求めます。もし補給線を断たれたり、あるいは、備えを怠っていた敵の行動によってほかの面で深刻な打撃を受けたりすれば、前へ押し進み、前進しようとする私たちの努力はすべて、必然的に無に帰してしまいます。そして、よくても、罪を退けることに十分な注意を払わなかったために、深刻な後退と時間の損失を被ることになります。結局のところ、私たちがこの「罪と死の体」の中にいる限り([ローマ 7 章 24 節](#))、「罪は戸口で待ち伏せして」いるのです([創世記 4 章 7 節](#))。また戦争では、こちらがどれほど計画を立てても、敵にも常に「敵なりの行動」があるのと同じように、私たちがクリスチャンとしての歩みを進めていく際にも、悪魔とその勢力は必ずあらゆるところで私たちに敵対し、私たちがあらかじめ十分に予想できないような方法で、また予想できないような時に、必ず誘惑を仕掛けてきま

¹ 『聖書の基礎 第3部 B: 罪論』IV.6.「背教と死に至る罪」を参照してください。

す。そうである以上、「私たちに対して戦いを挑んでいる」「肉の欲望」に少しでも心を許したり妥協したりするなら、当然、私たちはそのようなサタンの攻撃に対していつそう無防備になります——それは、有能な軍の指揮官に期待されることとは正反対です。まともな軍の指揮官であれば、決して重要な地点を意図的に完全な無防備状態にはしません——しかし、ここでペテロが与えている神からの指針を無視する時、クリスチャンは事実上それと同じことをしているのです。

重要な地点を「考慮の対象から外して」、もはやそこを守る必要がないことにすることができないのと同じように、私たちもこの世にいる限り、自分の罪の性質が持つ弱点を常に考慮に入れ、「肉の欲を満たすために、肉に機会を与え」ないようにしなければなりません([ローマ 13 章 14 節](#); [ローマ 6 章 11 節](#), [6 章 13 節](#), [6 章 19 節](#), [8 章 12 節](#), [12 章 1-2 節](#)参照)。しかし同時に、これらの弱点を気にするあまり、霊的成長に積極的に取り組むことをためらってもなりません。それは、すべての兵力を重要な地点の防御に配置しながら、肝心の目標をいつまでも攻撃しないことに相当します。したがって、避けるようにというペテロの勧めは、それ自体が最終目的なのではなく、この世にいる間の私たちの真の目標である、霊的成長、前進、実を結ぶ働きのための重要な前提条件なのです。もし私たちが、主に誉れをもたらし、私たち自身にも永遠にわたる祝福をもたらす三つの勝利の冠を得たいと願うなら、この世の事柄——とりわけ罪深い事柄——に深入りすることは、その目標にとって極めて逆効果です(控えめに言っても)。

(3) キリスト・イエスの良い兵士として、私と共に苦しみに耐えなさい。(4) 戦いに出ている兵士は、日常生活の事柄にかかわり合うことはない。自分を兵士として召した者を喜ばせるために、[そのような事柄を避ける]のである。([第二テモテ 2 章 3-4 節](#))

異邦人の中でのあなたがたの生活のあり方(12 節)：

異邦人(すなわち、不信者)の中で、あなたがたの生活のあり方を[道徳的に]良いものに保ちなさい。それは、彼らがあなたがたを悪を行う者としてそしめていても、あなたがたの良い行い(すなわち、生活と実を結ぶ働き)を目にする時、訪れの日には神に栄光を帰するようになるためである。([第一ペテロ 2 章 12 節](#))

前の節で、聖別された生活を送ることは、私たち自身の救い、霊的成長、そして報いという観点から見て、良いことであり、また必要なことであるという事実を示した後、ペ

テロは次にこの原則をさらに広げ、私たちが行うこと——どのように考え、語り、行動するか——は、親しい関係にある人であれ、わずかに接触するだけの人であれ、私たちの周囲にいるすべての人にも大きな影響を及ぼすことを思い起こさせています。結局のところ、私たちは目に見えない大きな戦いのただ中にいるのであり、この世において、決して何ものにも拘束されない自由な存在ではありません。悪い行いは、私たち自身に悪影響を及ぼすだけでなく、私たちが接するすべての人にも悪い影響を及ぼす可能性があります([ローマ 2 章 24 節](#))。ですから、主を不快にさせる悪い模範となるのではなく、良い模範となるよう努めるべきです。それは、単に私たち自身の益がかかっているからだけではありません(もちろん、それも確かに重要です。悪い面では懲らしめを避けるということだけでなく、「神を喜ばせる」者たちに与えられる、今この時における、また永遠における、あらゆる良いもののためでもあります:[ヘブル 11 章 5-6 節](#))。それだけでなく、私たちの周囲にいるすべての人に益をもたらす可能性があるからです。まず信者たちに対して([ガラテヤ 6 章 10 節](#))、そしてまた、私たちを見ているかもしれない不信者たちに対してもそうです([第一コリント 9 章 22 節](#))。結局のところ、もし私たちが本当に、隣人や同僚が救われ、彼らと共に「訪れの日」に喜ぶことができるようになることを願っているなら(すなわち、彼らが私たちの模範に応答するなら、その日、罪に定めるためではなく、報いを定めるための裁きを受けることになるのです)、私たちのクリスチャンとしての証しを損なうものは取り除き、その代わりに、神にかなった仕方で彼らの前に私たちの光を輝かせるよう努めるべきなのです。

「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためである。」([マタイ 5 章 16 節](#))

主がここで用いておられる、上で強調したこの表現は、ペテロが今私たちが考察している節で用いているものと同じです。すなわち、「良い行い」(ギリシア語: *kala erga* / *καλὰ ἔργα*)です。この表現は広く誤解されているため、ここで説明しておくことが適切でしょう。「行い」とは、私たちが考えること、語ること、行うこと、そのすべてを指しています。最後の裁きにおいて、不信者たちは「それぞれ自分の行いに応じて」評価されます([黙示録 20 章 12-13 節](#))。これは明らかに、彼らの人生全体に対する徹底した吟味を意味しています。広く流布している見解や神学的な推測とは異なり、この裁きは、彼らの罪が永遠の命を妨げていることを証明するためのものではありません。キリストはすべての罪のために死なれたのであり、この裁きは罪そのものについての裁きではないのです。不信者たちは、自分たちが「行った」どのようなことも、救いを受ける根拠としては十分ではなかったことを、余すところなく詳細に示されることになります。言い換えれば、彼らの「行い」のうち、真に「良い」と呼べるものは一つもな

かったことが、疑いの余地なく明らかにされるのです。なぜなら、彼らがこれまで「行った」いかなることも、聖霊の力によって行われたものではなかったからです。

イエスは答えて言われた。「神のわざとは、神がお遣わしになった者を信じる
ことである。」([ヨハネ 6 章 29 節](#))

私たちがまず、神から行うように召された土台となる「わざ」、すなわち救いのためにイエス・キリストに信仰を置くという「わざ」を「行って」はじめて、私たちは信者となり、その後はじめて「良い行い」をすることができるようになります。不信者の行うすべてのわざは、必然的に「汚れた衣」のようなものです([イザヤ 64 章 6 節](#))。なぜなら、そもそもそれらは、イエス・キリストの御名によって神の栄光のために、神の御霊によって行われたものではないからです。不信者の行うことは何一つ「神を喜ばせる」ことができません(例えば、[第一コリント 12 章 3 節](#))。神の目に「良い」とされる行いをするのは、信者だけです。したがって、不信者の行うことは、私たちの目にはどれほど犠牲的で立派に見えたとしても、キリストへの信仰がなければ、決して救いをもたらすことはできません。

(30) では、何と言うべきか。義を追い求めなかった異邦人は義を得た。それは信仰による義である。(31) しかし、義に至る道として律法を追い求めたイスラエルの民は、その目標に達しなかった。(32) なぜか。それは、彼らが信仰によってではなく、あたかも行いによるかのようにそれを追い求めたからである。彼らは、つまずきの石につまずいたのである。([ローマ 9 章 30-32 節](#) /NIV 訳)

(8) あなたがたは、[キリストへの]信仰を通して[神の]恵みによって救われたのである。そして、これはあなたがた自身から出たものではない——神の賜物である。(9) また、それはあなたがたの行ったことから出たものでもない(字義的には「行いからではない」)。それは、だれも誇ることがないためである。([エペソ 2 章 8-9 節](#))

この問題について多くの混乱が生じているのは、「行いのない信仰は死んでいる」というヤコブの有名な言葉が誤って理解されていることによります([ヤコブ 2 章 22 節, 2 章 26 節](#))。しかし、ヤコブが真に「良い行い」について述べていることは、言うまでもないはずです。それは、神と神の真理に応答している信者だけが生み出すことのできる種類の「行い」であり、文脈に挙げられているアブラハムとラハブの例がそのことを十分にはっきりと示しています([ヤコブ 2 章 21-25 節](#))。真の信者は皆、神に喜ばれることを考え、語り、行います。そして、この神にかなった振る舞い、これらの神にかなった「行

い」が、彼らの信仰を証明し、彼らを「義と認める」のです。ペテロがここでこの言葉を用いているのも、まさにこの意味においてです。私たちがクリスチャンとしてふさわしく振る舞い、神にかなったことを考え、それが神にかなった行いやわざとなって現れる時、私たちはそのような行動と神にかなった言葉によって、私たちに敵対する不信者たちの中傷が事実ではないことを示します。したがって、不信者たちが私たちについて何を言おうとも、もし私たちが本当にイエス・キリストが望んでおられるように歩んでいるなら、そのような中傷にはまったく根拠がありません。そのために私たちが苦しむとしても、その苦しみは私たちに非のないものであり、キリストに恥をもたらしではなく、むしろキリストに栄光をもたらすものとなります。そして、私たちが真に良い行いを続けるなら、イエス・キリストのために真実に行ったことは何一つ、永遠の報いを受けずに終わることはないことを確信することができます ([マタイ 6 章 19-21 節](#), [10 章 42 節](#); [ガラテヤ 6 章 9-10 節](#); [エペソ 2 章 10 節](#))。

訪れの日に神に栄光を帰する(12 節)：

異邦人(すなわち、不信者)の中で、あなたがたの生活のあり方を[道徳的に]良いものに保ちなさい。それは、彼らがあなたがたを悪を行う者としてそしていても、あなたがたの良い行い(すなわち、生活と実を結ぶ働き)を目にする時、訪れの日には神に栄光を帰するようになるためである。([第一ペテロ 2 章 12 節](#))

聖霊の靈感のもとで、ペテロは、私たちの生活による良い証しがもたらし得る結果を強調することが重要だと考えていたことは明らかです。この戦いを正しく、神にかなった仕方で戦う者たちのために主が備えておられる永遠の報いによって、私たちが動機づけられることは、確かに良いことであり、ふさわしいことです。² しかし、良い証しが私たち自身にとって有益であるということに加えて、ペテロはまた、これ——私たち自身の正当で神にかなった益——は、全体の一部にすぎないことを思い起こさせています。私たちはまた、私たちを見ている人々の益のため、そして神の栄光のために、しっかりとしたクリスチャン生活を送るよう動機づけられる必要があります。イエス・キリストは、私たちと私たちのクリスチャンとしての歩みを見ているすべての不信者を含め、すべての人のために死なれました。もし私たちが、不信者たちの世界の中で、語ることと行うことを通して神の光を本当に輝かせるなら、そして、それが最終的にただ一人でも救われることにつながるなら、ここでペテロが述べている目的は達成されることになります。すなわち、私たちを知っている人々が救われ、やがてキリストがご自身の教会を評価され

² 『[来たる艱難期](#)』第 6 部.I.7.『[教会の裁きと報い](#)』<リンク先ファイルの 42 頁->を参照してください。

る日に、私たちと共に「神に栄光を帰する」者となることです——なぜなら、彼ら自身も信じる者となったからであり、それはキリストに栄光をもたらすと同時に、彼らにとって死から命へと移ることもあるからです。それならば、私たちには、主の栄光を求め、すべての人の救いを求め、そして自分自身の永遠の報いを求めるという、この三重の使命があるのですから、この地上でのごく短い「寄留と旅」の間([第一ペテロ 2 章 11 節](#))、何の非難も受けることのない良いクリスチャンとしてこの世を歩むよう、なおさら努めるべきではないでしょうか。私たちには果たすべき重要な使命があります——実に、これ以上に重要な使命はありません——そして、私たちの証しに非難をもたらしかねないあらゆるものを避け、その代わりに、私たちが語ること、行うことのすべてにおいてイエス・キリストの愛とあわれみを映し出すよう心を配るという、ここでのペテロの教えに従ってこそ、私たちはこの使命を十分に、そして首尾よく果たすことができるのです。

主のために、定められたすべての人間の権威に従いなさい(13 節)：

主のために、定められたすべての人間の権威に従いなさい。主権者である王に対してであれ……([第一ペテロ 2 章 13 節](#))

ここで何よりも重要な点として注目すべきなのは、この文の斜体部分、すなわち「主のために」です。イエス・キリストを代表する者として、私たちが主について証しするその証しのためにも、「定められた人間の権威」に従うことは重要です。³ つまり、私たちが権威に従うのは、イエス・キリストのためなのです。それが主の教会に対する御心です。第二に、尊重し従わなければならないのは、正当な権威、すなわち個々の信者がその下で生活している、正式に成立している政府であるという点にも注意しなければなりません。それが具体的に何を意味するかについて言えば、歴史上の圧倒的大多数の場合、信者がどこに住んでいようと、そこで実際に権力を行使している政府が、まさに「定められた人間の権威」であると言って差し支えないでしょう。そして、そのような正式に成立している権威が存在するところでは、それは……神によって立てられているのです。

³ ここで本文が何を意味しているかについては、疑問の余地はありません。というのも、ギリシヤ語の動詞 *hypotasso* (ヒュポタッソー) は、[ヘブル 12 章 9 節](#)、[ヤコブ 4 章 7 節](#) で神に従うことについて用いられているのと同じ語であり、また [エペソ 5 章 24 節](#) では、主イエス・キリストの花嫁として主に従うことについて用いられているからです。さらに、この動詞は語源的には軍事的な背景を持つ言葉であり、軍隊では不服従が許容される余地はほとんどありません。この語には、これから行われる作戦に備えて隊列に加わり、命令に従うという意味合いがあります ([ローマ 13 章 1 節](#), [13 章 5 節](#); [テトス 3 章 1 節](#) でも同じ動詞が用いられています)。

(1) すべての人は、[すべての]上に立つ権威に従いなさい。神によって[立てられた]のでない権威は存在しないからである。そして、存在している権威も[また]神に服している。(2) したがって、[定められた]権威に逆らう者は、神が[秩序立てて]定められたものに逆らっているのであり、そのようにする者たちは、自らの上に裁きを招くことになる。(3) 支配者たちは、善い行いをする者を恐れさせて思いとどまらせるために存在するのではなく、むしろ悪い行いをする者のために存在するからである。それでは、あなたは権威を恐れずにいたいと思うか。それなら善を行いなさい。そうすれば、彼らから称賛を受けるであろう。(4) 彼らはあなたの益のために、あなたのために神に仕えている者だからである。しかし、もし悪を行うなら、恐れなさい。彼らが処罰する権力(文字どおりには「剣」)を与えられているのは、理由のないことではないからである。彼らは、悪を行う者に厳しい報復を加えることによって、神に仕えているのである。(5) したがって、この厳しい処罰のためだけでなく、良心のためにも、権威に従う必要がある。(ローマ 13 章 1-5 節)

パウロがこの手紙を書いた当時、彼が従っていた「定められた人間の権威」は、すでに何度も彼を不当に投獄し、虐待していました。そして間もなく、それ以上のことを彼に行い、最終的には彼を不当に処刑することになります。このことを考えれば、この箇所の意味はこれ以上ないほど明白です。たとえ政府が、私たちが望む正義の基準にはるかに及ばないとしても、そのことだけを理由に、その政府は神が立てられた権威ではない、と考えることはできません。

では、政府がどれほど悪くなれば、信者は神からそれに従わないことを許されるのでしょうか。スミルナの教会時代は、その全期間にわたって迫害の影の下にあり、十の長期にわたる「艱難」の時期がありました(黙示録 2 章 10 節)。しかも、これらの信者たちは、単に機能不全に陥った政府や専制的な政府の犠牲者だったわけではありません。彼らは、キリスト者であるというだけの理由で実際に迫害されたのです。それに対して、私たちの主は彼らに何と言われたのでしょうか。「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、いのちの冠を与えよう」。彼らに命じられたのは、苦しみの中を忍耐し、降りかかってくるものに耐えることであって、それに抵抗したり、ましてそこから逃げたりすることではありませんでした。もちろん、これらの信者たちは信仰を捨てたわけではなく、祈りや聖書の教えやキリスト者としての奉仕をやめたわけでもありませんでした。まさにそれらのことが彼らをキリスト者として明らかにし、迫害を招いたのです。また、ローマの法廷に引き出されたとき、キリストへの信仰を撤回して皇帝を礼拝することもしませんでした。そのため、多くの者が地上の命を失いました。しかし、それによって彼らの永遠の命は確かなものとされ、真の殉教に伴う報いも与えられたのです。このことや聖書の他

の例から、この服従の命令（聖書の他の箇所でも繰り返されています。例えば[テトス 3 章 1 節](#)）は、私たちが、命じられていることを行うのをやめるよう要求するものではないと言えます（ダニエルが祈ることをやめず、使徒たちが福音を伝えることをやめなかったように：[ダニエル 6 章 1 節以下](#)；[使徒行伝 4 章 18-20 節](#)）。また、禁じられていることを行うよう要求するものでもありません（ダニエルの三人の友人たちがそうすることを拒んだように：[ダニエル 3 章 1 節以下](#)）。しかしこの命令は、明らかに「神によって立てられた」政府に対して武器を取って立ち向かうことを、私たちに禁じています。

悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるために、神によって遣わされた者として（14 節）：

……あるいは、[その他の]統治者たちに従いなさい。彼らは、悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるために、神によって遣わされた者だからである。（[第一ペテロ 2 章 14 節](#)）

政府が、そしてさらに受け入れにくいことには政府の役人たちまでもが、すべて「神によって遣わされた」と考えることは、歴史を多少なりとも読んだことのある人や、人生経験のある程度積んだ人にとっては、受け入れがたいことに思えるかもしれません。しかし、この言葉の率直な意味を文字どおりに受け取るべきであることは、先に引用したローマ人への手紙におけるパウロの同様の言葉からも明らかです（[ローマ 13 章 1-5 節](#)；[テトス 3 章 1 節](#)参照）。その箇所の第 1 節でパウロが述べているように、「神によって[立てられた]のでない権威は存在しない」のであり、その直後には「存在している権威も[また]神に服している」とあります。つまり、権威を持つ者が何らかの不正を行ったとしても、それについて最終的な判断や裁きを下すのは私たちではありません。その権限は究極の裁き主である神に属しているからです。これは、どの政府や政府の役人にとっても恐るべき事実として受け止めるべきものです——少なくとも、そうであるはずです。同時にこれは、定められた権威によって不当な扱いを受けたり、虐待されたり、さらには迫害されたりするとき、信者に慰めを与えるためのものでもあります。実際にすべてを支配しておられるのは神であり、神が私たちの正しさを明らかにしてくださるからです——私たち自身が愚かにも、自分の正しさを自力で証明しようとしさえしなければ、です。

したがって、[定められた]権威に逆らう者は、神が[秩序立てて]定められたものに逆らっているのであり、そのようにする者たちは、自らの上に裁きを招くこととなります。（[ローマ 13 章 2 節](#)）

この原則は、犯罪者に対して自衛する権利が私たちにないという意味ではありません(イエスは、その目的のために剣を携えるよう弟子たちに言われました:[ルカ 22 章 36 節](#))。また、不当な訴追から自分を守るために合法的な手段を用いることが許されないという意味でもありません(パウロ自身、確かにそうしました。例えば[使徒行伝 25 章 11 節](#))。しかしこれは、定められた権威が私たちに行うよう命じることには従い(例えば、税金を納めること:[マタイ 22 章 17-21 節](#); [ローマ 13 章 6-7 節](#))、行わないよう命じることが行わない([マタイ 26 章 52 節](#); [テトス 3 章 1 節](#); [第一ペテロ 4 章 15-16 節](#))という原則が絶対的なものであることを意味しています。

(1) アサフの歌。

神は力ある者たちの会衆の中に立ち、
神々(文字どおりには「力ある者たち」、すなわち人間の裁判官たち)の中で裁きを行われる。

(2) いつまで、あなたがたは不正な裁きを行い、

悪しき者たちを偏り見るのか。セウ

(3) 貧しい者と父のない者を守り、

苦しむ者と乏しい者に正しい裁きを行え。

(4) 貧しい者と乏しい者を救い出し、

悪しき者の手から彼らを解放せよ。

(5) 彼らは知らず、また悟らない。

闇の中を歩き回っている。

地のこれらすべての基は揺らいでいる(すなわち、正義の欠如による不安定さ)。

(6) わたしは言った、「あなたがたは神々であり、

あなたがたはみな、いと高き方の子らである。

(7) しかし、あなたがたは人のように死に、

君たちの一人のように倒れるであろう」。

(8) 神よ、立ち上がって地を裁いてください。

あなたはすべての国々を受け継がれるからです。

([詩篇 82 篇 1-8 節](#) /NKJV 訳)

たとえ権威が完全とはほど遠いものであっても、それに従うというこの命令を受け入れるために信者が身につけるべき、いわば「感情面での鎧」の大きな部分を成すのは、神が実際にすべてを支配しておられるという確実で揺るぎない認識です。そこには、神が用い、導いておられるこれらの中間的な手段も含まれており、それらは、自覚しているかどうかにかかわらず、神に対して責任を負っています。私たちは、神が自由意志を許しておられる以上、欠点のある人間が欠点のある制度を生み出し、その制度

が非常に不完全な仕方で機能することは避けられない、ということを覚えておかなければなりません。しかし神は常に私たちの最善を心にかけておられ、その予知と完全な摂理によって、私たちのために必要なものを備えてくださっています。さらに、私たちが従っている制度が「機能不全」に陥ったときにも、神が私たちを守ってくださり、不当な扱いを受けたときには、私たちの正しさを明らかにしてくださることも確信できます。

(32) 悪しき者は正しい者を待ち伏せし、彼を殺そうとねらっている。(33) しかし主は、彼を悪しき者の手に任せず、裁判にかけられるときにも、罪に定められるままにはされない。(詩篇 37 篇 32-33 節 /NIV 訳)

「あなたを攻めるために造られる武器は、どれも成功することはなく、裁きの場であなたを訴えるすべての舌を、あなたは退ける。これが主のしもべたちの受け継ぐもの、わたしから受ける彼らの正しさの証明である」と主は言われる。(イザヤ 54 章 17 節 /NIV 訳)

愛する者たちよ、自分で復讐してはいけません。むしろ、御怒りに任せなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの、わたしが報いる」と主は言われる。(ローマ 12 章 19 節 /NKJV 訳)

信者はまた、完全な正義がやがて実現するということを、しっかり心に留めておく必要があります。私たちの主が再臨された後の千年王国において、主の王国は完全な義の王国となり、正義は適切な時に完全な形で執行され、私たちもその統治において重要な役割を担うという祝福にあずかることになります(イザヤ 32 章 1-2 節; 黙示録 2 章 27 節, 3 章 21 節)。

主よ、怒りをもって立ち上がり、私の敵の激しい怒りに立ち向かってください。わが神よ、目を覚まし、正義を定めてください。(詩篇 7 篇 6 節 /NIV 訳)

「神よ、あなたの御座(すなわちメシヤの御座: [ヘブル 1 章 8 節](#)参照)は世々限りなく続き、正義の杖があなたの王国の杖となる」。(詩篇 45 篇 6 節 NIV 訳; 参照: [詩篇 71 篇 1-2 節](#), [89 篇 14 節](#), [97 篇 2 節](#))

彼(すなわちメシヤ)の統治と平和の偉大さには終わりが無い。彼はダビデの王座に着き、その王国を治め、その時から永遠に至るまで、正義と義をもってこれを確立し、支える。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(イザヤ 9 章 7 節 /NIV 訳)

しかし彼(すなわちメシヤ)は、義をもって貧しい者を裁き、正義をもって地の困窮する者たちのために判決を下す。彼はその口の杖をもって地を打ち、その唇の息をもって悪しき者を殺す。(イザヤ 11 章 4 節 /NIV 訳)

愛によって一つの王座が堅く立てられ、真実をもって一人の人(すなわちメシヤ)がその上に座する——ダビデの家から出た者であり、裁きにおいて正義を求め、義を速やかに実現する者である。(イザヤ 16 章 5 節 /NIV 訳)

彼(すなわちメシヤ)は、裁きの座に着く者には正義の霊となり、門で戦いを押し返す者たちには力の源となる。(イザヤ 28 章 6 節 /NIV 訳)

見よ、一人の王(すなわちメシヤ)が義をもって治め、支配者たちは正義をもって統治する。(イザヤ 32 章 1 節 /NIV 訳)

主は高く上げられている。主は高き所に住まれ、シオンを正義と義で満たされる。(イザヤ 33 章 5 節 /NIV 訳)

「見よ、わたしが支えるわたしのしもべ(すなわちメシヤ)、わたしの喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は諸国民に正義をもたらす」。(イザヤ 42 章 1 節 /NIV 訳)

「わたしの義は速やかに近づき、わたしの救いは途上にあり、わたしの腕(すなわちメシヤ)は諸国民に正義をもたらす」。(イザヤ 51 章 5 節前半 /NIV 訳)

私たちの主の千年王国においては、支配権を握っている権威が正当であり、神によって立てられたものであるという事実について、疑いの余地はまったくありません。神の御子が完全な義をもって統治し、完全な正義を執行されるからです。そして、その完全な統治の祝福は、それ以前のあらゆる人間の政府——とりわけ、その直前に存在する反キリストの政府(それは最悪のものとなります)——とは鮮明な対照をなすことになります。

しかし、悪(艱難期における反キリストの全世界的支配)と善(キリストが統治し、私たちもキリストと共に千年間統治する千年王国)というように、物事がいつもこれほど明白に区別できるわけではないことも事実です。さらに、人類の歴史には、信者が互いに競合する複数の統治体制の下に置かれる場合があります。この国における独立革命と

南北戦争は、その二つの例です。また、ある政府が別の政府に取って代わられつつある国や、国内あるいは国外の勢力によってそのような交代の脅威にさらされている国でも、しばしば同じことが起こるのを見ることができます。このような状況は、人類の歴史において決して珍しいものではありませんが、一方で「通常の状態」でもなく、そのため聖書でも直接取り扱われてはいません。そのような場合には、どちらが正当な権威であり、どちらがそうでないかを、個々の信者自身が判断しなければならないこともあります。多くの場合、政権の交代は比較的速やかに起こり、新しい体制に適応するだけで済むでしょう。しかし時には、現在権力を行使している集団と、それに取って代わろうとする集団との間で、ある程度長期にわたる争いが続く場合もあります。

そのような時、状況によって否応なく一方または他方の大義に加わるよう迫られた信者が、具体的にどうすべきかは、良心の問題です。そして、そのような多くの場合（例えば、上に挙げた二つの例のような場合）、現状の体制を選ぶ者であれ、それに代わるとされる体制を選ぶ者であれ、その人個人の事情を知らないまま、一方を全面的に非難することは間違いでしょう。しかし、確実に言えることがあります。それは、聖書が求めている合法的な服従の範囲を越えて、何らかの政治運動を積極的に支持する場合、信者はその選択がもたらし得る結果を、曇りのない目で十分に見極める必要があるということです。そのような選択は、勇気ある立派なものである場合も十分にあり得ますし、倫理的・道徳的にも間違いとは言えない場合さえあるでしょう。しかし、それが自分自身、自分の家族、そして自分の国に重大な結果をもたらさずに済むことは、ほとんどありません。また、「選ばない」ということも一つの選択であり、そのために臆病だとの非難を受ける危険があるかもしれません。それでも信者は、どれほどその時には避けることのできない必要な決断に思えたとしても、そのような大義に身を投じる前に、私たちがなぜこの地上にいるのか、そして何よりもまず、私たちが誰の大義に仕えているのかを思い起こす必要があります。

善を行うことによって愚かな人々の無知を黙らせなさい(15 節)：

神の御心は、すなわち、あなたがたが善を行うことによって愚かな人々の無知を黙らせることである……([第一ペテロ 2 章 15 節](#))

このシリーズの初めから述べてきたように、ペテロがこの手紙を書いた主な目的の一つは、手紙を送った信者たちが耐えていた苦しみに関して、彼らを慰め、励まし、備えることでした。私たちの証しに非難をもたらしかねないあらゆることを避け、その代わりに、言うこと行うことすべてにおいてイエス・キリストの愛と憐れみを表すことは、普通の

状況でも難しいものですが、政府機関、雇用主、あるいは家族(親や夫など)といった権威ある立場の者から不当な扱いを受けている場合には、特にそうです。そのため、ペテロがこの重要な問題についての論述を、すべての正当な権威に正しく服従する必要性を取り上げることから始めたのは、疑いなくそのためでしょう。しかし同時に、私たちがその権威の下にない人々に対しても含め、すべての人に対してキリスト者らしく振る舞うことが、私たちのキリスト者としての証しの極めて重要な部分であることも事実です。そこでペテロは今、正当な権威との関係だけではなく、生活のあらゆる領域におけるキリスト者としての正しい行動という一般的な主題に戻っています。

未信者が私たちの信仰について否定的な憶測をするのをやめさせることは、生活のあらゆる領域における「神の御心」であり、それは「善を行うこと」によってのみ成し遂げることができます。この「善を行うこと」は、何よりもまず「悪を行うこと」を避けることです。すなわち、イエス・キリストに従う者にふさわしくないことを行ったり、言ったりすることを避けることです(そして、この二つを実行するためにも有益なこととして、そのようなことを「考える」ことも避けるべきです)。つまり、私たちのキリスト者としての証しを汚しかねないものを何であれ避けることこそ、私たちを中傷し、それによって私たちの主をも中傷しようとする者たちを「黙らせる」最善の方法なのです。何と言っても、私たちはこの世における主の使節なのです([第二コリント 5 章 20 節](#); [エペソ 6 章 20 節](#); [第一ペテロ 2 章 21 節](#))。そして悪しき者とその手先は、私たちを主の御前で訴える材料にしようと、私たちの側のどんな悪事をも常に探し求めています([黙示録 12 章 10 節](#); [ゼカリヤ 3 章 1 節](#), [第一ペテロ 5 章 8 節](#)参照)。それだけでなく、私たちを見ている人々の心と思いの中で、「キリスト者」という名に悪い印象を抱かせる材料にも利用しようとしています。反対に、私たちがその行いにおいて主を映し出すなら、私たちの生き方による証しは、真理を照らし出す強力な力となります([マタイ 5 章 14-16 節](#); [エペソ 5 章 8 節](#); [ピリピ 2 章 15 節](#))。そして、それが一貫して敬虔な仕方になされるなら、多くの意味で、これこそ最も効果的な伝道となります。しかし、私たちの行動が平均的な未信者の行動とそれほど違わず、あるいはそれほど優れたものでないなら、その証しは不十分なものとなるでしょう。そして、真理について疑いを抱いている人や、真理に敵意を持っている人は、たとえ私たちの言葉がどれほど恵みと真理に満ちていたとしても、その言葉よりも私たちの不十分な行動のほうを重く見るであろうことは間違いありません。

積極的な意味で「善を行うこと」とは、神が私たち一人ひとりに与えてくださった方法で、神のご計画を推し進めることです。これには、いつの時代のすべてのキリスト者にも当てはまるいくつかの基本的なことが含まれます。すなわち、霊的に成長すること、日々の歩みにおいてキリストを第一とすること、そして聖霊から与えられた賜物に従って主のために実を結ぶことです。それが祈りによるものであれ、励ましによるものであ

れ、御言葉を通して霊的な導きを与えることによるものであれ(それぞれに与えられた賜物と機会に応じて)、あるいはキリストにある兄弟姉妹の必要を満たすための物質的な援助によるものであれ(それは彼ら自身の霊的成長、前進、そして実を結ぶ働きのために必要なものです)、そのような敬虔な応答のすべてを通して、私たちはキリストの愛を具体的に示すことになります。そして、この「良い行い」による証しもまた、未信者の世が無視したり軽く見たりすることのできないものです。しかし、私たちは同時に、高慢、ねたみ、そしてサタンの影響のために、そのような真にキリスト者らしい「善」の行いそのものが、未信者の世からさらなる反対を招く原因となる場合さえあることを心に留めておく必要があります。もしそうなったとしても、私たちがこのように「キリストの苦しみにあずかる」ことは、それだけいっそう、私たちに対する主の喜びとなり、また私たちの永遠の報いにつながるという事実によって、勇気づけられることができます([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ヒリピ 1 章 29-30 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第二テモテ 2 章 12 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-13 節](#); [マタイ 10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#), [10 章 21 節](#), [10 章 38-39 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#), [14 章 27 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#); [第二コリント 4 章 10-11 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#); [第二テサロニケ 1 章 4-5 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#)参照)。私たちが善を行うなら、最後には主が私たちの正しさを明らかにしてくださり、それを明るみに出してくださることを、十分な確信をもって信賴することができます([詩篇 112 篇 1-10 節](#))。

主はあなたの義を光のように、あなたの正しさを真昼のように明らかにされる。[\(詩篇 37 篇 6 節\)](#) /NKJV 訳)

心のまっすぐな者たちはこれを見て喜び、悪しき者たちはみな口を閉ざす。
[\(詩篇 107 篇 42 節\)](#) /NIV 訳)

自由を悪の覆いとして用いないこと(16 節)：

……自由な者として行動しなさい。しかし、その自由を悪の覆いとして用いることなく、神のしもべとして行動しなさい。[\(第一ペテロ 2 章 16 節\)](#)

イエス・キリストを信じる者として、私たちはモーセの律法から解放されています。それは、イエス・キリストがその犠牲によって、すなわちその血によって、私たちすべてのために十字架上で死なれたことによって、律法の要求を満たしてくださったからです([ローマ 4 章 14 節](#), [6 章 14 節](#), [7 章 4 節](#), [8 章 2 節](#), [10 章 4 節](#); [ガラテヤ 2 章 19 節](#), [3 章 13 節](#), [4 章 3-7 節](#), [5 章 4 節](#), [5 章 18 節](#); [ヘブル 7 章 12 節](#), [10 章 1 節](#))。

この自由のために、キリストは私たちを自由にしてくださったのです。ですから、[その自由のうちに]しっかりと立ち、再び奴隷のくびき(すなわち、律法)につながれてはなりません。(ガラテヤ 5 章 1 節)

この自由は実にすばらしい祝福です。それによって今日の私たち信者は、律法の制約や規定に妨げられることなく、御霊に促されるままにイエス・キリストに仕えることができます。しかし、自由は機会を与えてくれる一方で、神にかなった、聖別された、正しい仕方注意深く用いなければなりません。このことはパウロも明確に述べています。

兄弟たちよ。あなたがたは自由を得るために召されたのである。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛によって互に仕えなさい。(ガラテヤ 5 章 13 節)

私たちは、自分自身の楽しみを追い求めるためではなく、キリストに栄光を帰すために召されています(マタイ 16 章 24 節)。罪深い性質の欲するままにふるまうためではなく、肉ではなく御霊に従うために召されているのです(ガラテヤ 5 章 16-25 節)。したがって、私たちクリスチャンに与えられている自由は、意味のない自己満足のためではなく、イエス・キリストに仕えるために用いるべき賜物なのです。ペテロがこの節で明らかにしているように、「キリストのしもべであること」と「自由を覆いとして用いること」は、互いに両立しない行為であり、まさに正反対の方向を指しています。ですから、自分の欲望に従い、自由を利用して自分自身を喜ばせるのではなく、私たちの主人であるイエス・キリストを喜ばせたいのであれば、主に仕え、主のために働く、真に良いしもべでなければなりません(マタイ 16 章 24 節; マルコ 8 章 34 節; ルカ 9 章 23 節)。それこそが、私たち皆が待ち望んでいる「よくやった！」という言葉をいただく道であり(マタイ 25 章 21-23 節; ルカ 19 章 17 節)、豊かな永遠の報いを受ける道なのです。

だから、[神の]良い働きをすることに疲れ果ててはならない。なぜなら、あきらめないならば、[定められた]時に、私たちは[報いを]刈り取ることになるからである。(ガラテヤ 6 章 9 節)

すべての人を敬い、兄弟たちを愛しなさい(17 節)：

すべての人を敬い、[信者である]兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。(第一ペテロ 2 章 17 節前半)

この節によれば、神の目には、すべての人間が基本的な敬意を受けるに値します。私たちは皆、神のかたちに造られており([創世記 1 章 26-27 節](#); [第一コリント 11 章 7 節](#)参照)、イエス・キリストは、これまで生きた一人ひとりすべての人間の罪のために死なれました(例えば、[ヨハネ 1 章 29 節](#), [12 章 47 節](#); [第二コリント 5 章 14-15 節](#), [5 章 19 節](#); [第一テモテ 2 章 4-6 節](#); [ヘブル 2 章 9 節](#), [7 章 27 節](#); [第一ヨハネ 2 章 2 節](#), [3 章 5 節](#))。神はすべての人が救われることを望んでおられるのですから([エゼキエル 18 章 23 節](#); [マタイ 18 章 14 節](#); [ヨハネ 12 章 47 節](#); [使徒行伝 17 章 27 節](#); [第一テモテ 2 章 4 節](#); [第二テモテ 2 章 24-26 節](#); [第二ペテロ 3 章 9 節](#); [哀歌 3 章 33 節](#)参照)、信者が少なくともなすべきことは、すべての人を、キリストによって造られ、イエスがそのために死なれた、神にとって大切な者として、ふさわしい尊重と敬意をもって扱うことです。

「人の血を流す者は、人によってその血を流される。神がご自分のかたちに人を造られたからである。」([創世記 9 章 6 節](#) /NKJV 訳)

上の聖句が示しているように、基本的な敬意とは、他の人々の基本的な権利を侵害しないことに表れます。その第一で最も重要なものは生きる権利であり、それに続くのが、その肉体の命を維持するために必要な、自由と財産に関する基本的な権利です(これが第十戒の目的です)。それによって、すべての人がイエス・キリストにおいて神に応答する十分な機会を持ち、私たちすべてのために主が死んで備えてくださった永遠の命を得ることができるのです。

主はカインに言われた、「あなたの弟アベルは、どこにいますか」。彼は言った、「知りません。わたしが弟の番人なのでしょうか」。([創世記 4 章 9 節](#) /NKJV 訳)

上の節をほんの表面的に読むだけでなく、少し注意して見れば分かるように、他の人々に対する基本的な敬意とは、その人の「番人」となるために、その人の事柄に介入することによって示されるものではありません。むしろ、神がその人に与えておられるこの地上での生涯を、神がお許しになる限り生きていくために必要な基本的なものを、その人から奪わないことによって示されます。それは、その人が神に立ち返り、救われることを願うことです([使徒行伝 17 章 26-27 節](#))。したがって、すべての人を敬うよう命じているこの節は、慈善活動をしたり、いわゆる「善行家」になったりすることについて述べているものではありません。むしろ、他の人々が自由に行動し、自ら選択することができるように、その人のプライバシーと基本的な権利を尊重することについて述べているのです。それは、私たち自身も他の人々からそのようにしてもらいたいと願うのと同じです(これが、いわゆる「黄金律」の本当の意味です。[マタイ 7 章 12 節](#))。

他の人々の生活に不当に干渉することを避けることに加えて、すべての人を敬意をもって扱うというこの命令には、私たちが接する人々に対する態度において、あらゆるえこひいきを避ける必要があるというもう一つの側面があります。特に信者に対してはそうです([使徒行伝 10 章 34 節](#); [ローマ 2 章 11 節](#); [エペソ 6 章 9 節](#); [コロサイ 3 章 25 節](#))。

わたしの兄弟たちよ。栄光の主であるわたしたちの主イエス・キリストへの信仰を持ちながら、人を分け隔てしてはならない。([ヤコブ 2 章 1 節](#) /NKJV 訳)

貧しい人が軽んじられ、富んでいる人が特別扱いされるという例([ヤコブ 2 章 1-13 節](#))において、ヤコブが語っているのは、ある人々を、その世的な地位だけを理由に過度に敬ったり、特別な利益を与えたりする一方で、同じような地位を持たないというだけの理由で、他の人々、とりわけ他の信者を不利に扱うことです。同様に、パウロも[ローマ 12 章 16 節](#)で、「高ぶった思いをいだかず、かえって低い者たちと交わりなさい」(NKJV 訳)と言っています。すべての人を敬う場合と同様に、特に信者についても、ここでの要点は、その人たちを積極的に探し求めて社交的な付き合いをすることではありません。そうではなく、自分と同じ階級や社会的地位にない人、自分より貧しい人、教養の少ない人、異なる民族の人などをも受け入れ、世の基準から見て「価値が低い」というだけの理由で、御霊によって私たち一人ひとりに委ねられている神にかなった奉仕を、その人たちから差し控えないことなのです。

律法全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という一つの命令を守ることによって全うされるからである。([ガラテヤ 5 章 14 節](#) /NIV 訳)

「隣人」とは、何よりもまず他の信者たちのことです([ガラテヤ 5 章 13-14 節](#))。そしてここに、今考察している節([第一ペテロ 2 章 17 節](#))における「敬う」という命令と「愛する」という命令との違いがあります。すべての人間は私たちの敬意を受けるに値します。私たちは、主が望んでおられるのと同じように、彼らが救われることを願っています(そして福音を受け入れる意思のある人なら、誰にでも喜んで福音を伝えます)。しかし、すべての信者は私たちの愛を受けるに値します。私たちは、彼ら自身の益のため、イエス・キリストの教会を建て上げるため、そして私たちのために死んでくださった主の永遠の栄光のために、彼らが霊的に成長し、前進し、実を結ぶことを願うのです。このためであることは間違いないでしょうが、ペテロは「敬う」をアオリストの相で置き(一般的で、一度限り確立された状態を示しています)、一方「愛する」を進行的な相で置いています(継続して行うべきことを示しています)。すべての人を敬うことは、その人たち

の自由意志による選択を守ることに関係しています(私たちの行いによって福音の真理を証しし、また、それを望む人には言葉によっても証します。[マタイ 7 章 6 節](#))。兄弟たちを愛することは、御霊が私たちに与えてくださった賜物を、主が私たちに召してくださった奉仕を通して用いることにより、彼らが霊的に成長し、前進し、実を結ぶ機会を最大限にすることと深く関係しているのです。

イエスは三度目に言われた、「ヨナの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは、「わたしを愛するか」と三度目に言われたので、心を痛めてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。[\(ヨハネ 21 章 17 節/NKJV 訳\)](#)

神を恐れ、王を敬いなさい(17 節)：

……神を恐れ、王を敬いなさい。[\(第一ペテロ 2 章 17 節後半\)](#)

この二つの命令は、その直前の二つの命令と直接対応していますが、ここでは順序が逆になっており(いわゆる「交差配列[キアスムス]」)、世俗的なものが後に、霊的なものが先に置かれています。このような配列には、キリストにある兄弟姉妹に対する私たちの霊的な責任と、神に対する私たちの義務とを並べて置き、その両側を、この世の事柄に対する私たちの義務、すなわち私たちが出会う不信者たちと、この現在の世を支配している権威の仕組みに対する義務を述べた命令で囲む、あるいは包み込むという利点があります。ほとんどの人の目に入るのは、確かに数もはるかに多く、目にも見えやすい外側の二つだけです。しかし、イエス・キリストに属する私たちは、すべての栄光があるのは、より尊く、目には見えにくい内側の霊的な二つの責任であることをよく理解しています。すなわち、兄弟たちを愛し、主を畏れ敬うことこそ、この地上における私たちの真の霊的な焦点であり、この地上にいる本質的な理由なのです。この世がそれとは異なる考えを持っていたとしても、そのことに変わりはありません。

主を恐れることは知恵のはじめである。その戒めを行う者はみな、良い悟りを持つ。主への賛美はとこしえに続く。[\(詩篇 111 篇 10 節\)](#)

主を恐れることは知恵のはじめであり、聖なる方を知ることは悟りである。
[\(箴言 9 章 10 節\)](#)

愛は積極的な動機となります。私たちは、兄弟たちを助けたいという心からの願いによって、正しいことを行うよう促されます。しかし、恐れ、すなわち畏敬もまた、私たちを動機づけます。私たちが何よりも避けたいのは、主を不快にさせることです(そして、主の愛ある懲らしめを受けることです:[ヘブル 12 章 5-13 節](#))。神は恵みによって、この両方を私たちに与え、私たちが左にも右にもそれることなく、まっすぐ道を歩み続け、自分の十字架を負って、シオンへと続く高き道をひたすら前へ進んでいけるようにしてくださっています([詩篇 84 篇 5-7 節](#))。そして、一方では、仲間のクリスチャンに対する正しい愛の態度によって(それは、彼らの霊的な必要に仕えることに表れます)、また他方では、主を正しく畏れ敬うことによって(聖なる歩みをし、霊的成長、前進、実を結ぶ働きにおいて、この世で主が私たちに望んでおられることを行うことによって)、私たちが正しく自分自身を動機づけているなら、すべての人(不信者を含む)を敬い、王(あらゆる権威を代表するもの)を敬うという、外に向けられた二つの命令も、私たちが愛する救い主にとって最も重要なことに焦点を合わせ続ける中で、おのずと果たされることとなります。

律法全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という一つの言葉によって全うされるからである。([ガラテヤ 5 章 14 節](#); 参照:[マタイ 22 章 36-40 節](#); [ローマ 13 章 8-10 節](#))

[第一ペテロ 2 章 17 節](#)のこの文脈にある四つの命令を合わせて考えると、それらは、この世にいるクリスチャンとしての、この世に対する私たちの責任のすべてを、そしてまた、私たちの主とその御体である教会に対する責任のすべてを要約しているのです。

(9) それゆえ、[クリスチャンとして]この体にいるにせよ、この体を離れているにせよ、私たちの願いは、主に喜ばれる者となることである。(10) なぜなら、私たちはみなキリストの裁きの座の前に立ち、それぞれが、この体を通して成し遂げたことに応じて、それが良いものであれ、価値のないものであれ、その報いを受けなければならないからである。(11) それゆえ、私たちは主を恐れることを知っているので、人々を説得しようと努めているが、神には、私たちが[本当は]どのような者であるかがすべて明らかである。そして、私たちが[本当は]どのような者であるかが、あなたがたの良心にも同じように明らかであると、私は信じている。([第二コリント 5 章 9-11 節](#))

しもべたちよ、十分な敬意をもって主人に従いなさい(18 節):

しもべたちよ、十分な敬意をもって主人に従いなさい……([第一ペテロ 2 章 18 節前半](#))

ここで「しもべ」と訳されているギリシヤ語 オイケーテス(oiketes) は、「家の一員」という意味で、実質的には奴隷と同義です。というのも、一世紀のギリシヤ・ローマ世界では、親族だけでなく奴隷も含む大きな(時には非常に大きな)家が一般的だったからです。

(30) そして、ふたりを外に連れ出して言った。「先生がた、救われるためには、何をしなければならないでしょうか。」(31) ふたりは言った。「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家の者たちも救われる。」(32) そして、ふたりは彼と、その家にいるすべての者に主の言葉を語った。(使徒行伝 [16 章 30-32 節](#))

パウロとシラスがピリピの看守とその家の者たちに福音を伝えたこの記述は、現代人には奇妙に思えるかもしれませんが、当時の慣習、そして古代一般の慣習には非常によく合っています。家は社会の基本的な単位であり、その長に従って、一つのまとまりとして行動する傾向があったのです([エレミヤ 35 章 2-19 節](#)参照)。ですから、この使徒たちの宣教によって看守の家の者たち全員が主に立ち返ったとしても不思議ではありません。そして、当時のギリシヤやローマの多くの家でも、家の者たち全員、あるいはほぼ全員が信者となったことがあったと考えられます。いずれにせよ、新しく信者となった者たちの多くは奴隷であり、彼ら自身が(さらには主人までもが)キリストを信じるようになったからといって、奴隷の身分から解放されたわけではありませんでした。奴隷制度は恐ろしいものですが、世界史上ごく最近まで、至るところに存在する制度でした。福音はすべての人に死からの解放を約束していますが、この世のほかの苦難からの解放を約束しているわけではありません。救われたからといって、病気がいやされるわけではなく、負っている金銭上の負債から解放されるわけでもありません。救われたからといって、結婚上の義務から解放されるわけでもありませんし([第一コリント 7 章 12-16 節](#)参照)、そのような大いなる救いを与えられる前に奴隷であったなら、奴隷の身分から解放されるわけでもありません。そうである以上、聖霊に導かれたペテロにとって、奴隷のくびきの下にあった新しい信者たちが、以前にもまして敬意を払い、自ら進んで従いながら、その身分において忍耐し続ける義務があることを確認するのは重要なことでした。結局のところ、信者が救いの時に受ける真に重要な身分の変化は、地上のものではなく、天に属するものだからです。

(21) 奴隷である時に召されたのか。そのことを気にしてはならない。しかし、

自由になることができるなら、むしろその機会を用いなさい。(22) 奴隷であって主にあって召された者は、主によって自由にされた者であり、同じように、自由人であって召された者は、キリストの奴隷だからである。(第一コリント 7 章 21-22 節)

現代の世界にも奴隷制度が存在しないわけではありません(ただし、その大部分は違法であるため、一般には目につきません)。しかし、生計を立てるために働かなければならない私たちは皆、健康や住まいや家族を維持するために必要な賃金に、ある意味で「奴隷」となっているとも言えます。古代ギリシヤのあることわざにあるように、貧しいとは生活のために働かなければならないことであり、極貧とは他人のために働かなければならないことです。そして、私たちの大部分は後者に当てはまります。そのため、信者である奴隷の正しい振る舞いについて新約聖書に与えられている教えは、雇用主のもとで働く私たちの大部分にも当てはまります。聖書的に言えば、雇用主は事実上、私たちの主人に相当するからです。

(5) 奴隷たちよ、肉による主人に、恐れおののきつつ、真心をもって、キリストに従うように従いなさい。(6) 人に喜ばれようとする者のように、目の前だけで仕えるのではなく、キリストの奴隷として、心から神の御心を行い、(7) 人ではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。(8) 奴隷であれ自由人であれ、だれでも良いことを行えば、その同じものを主から受けることを知っているからである。(エペソ 6 章 5-8 節)

(22) 奴隷たちよ、肉による主人に、すべてのことにおいて従いなさい。人に喜ばれようとする者のように、目の前だけで仕えるのではなく、神を恐れ、真心をもって従いなさい。(23) 何をするにも、人に対してではなく主に対してするように、心から行いなさい。(24) あなたがたは、主から相続という報いを受けることを知っているからである。あなたがたが仕えているのは主キリストである。(25) しかし、不正を行う者は、自分の行った不正に対する報いを受ける。そこにはえこひいきはない。(コロサイ 3 章 22-25 節)

(1) くびきの下にある奴隷たちは皆、自分の主人を十分な尊敬に値する者とみなしなさい。それは、神の御名とその教えとがそしられないためである。(2) また、信者である主人を持つ者たちは、彼らが兄弟であるからといって軽んじてはならない。むしろ、いっそうよく仕えなさい。その奉仕によって益を受ける者たちは、信者であり、愛されている者たちだからである。これらのことを教え、勧めなさい。(第一テモテ 6 章 1-2 節/NKJV 訳)

もちろん、重要な違いもあります。機会があれば、私たちは一つの仕事を辞めて別の仕事に移る自由があります。しかし、私たちの大部分が人生のどこかで経験しているように、良い仕事を見つけてそれを続けること——あるいは、より良い仕事に移ること——は、必ずしもそれほど容易ではありません。いずれにせよ、雇われている間は、私たちを雇っている組織や個人に対して、誠実に仕える義務があります。それは、真の主人がイエス・キリストである者にふさわしい仕え方、すなわち、主に栄光を帰し、私たちがその御名によって呼ばれる祝福を受けている、その栄光ある御名に何のそしりももたらない仕え方なのです。

善良で道理をわきまえた主人にだけでなく、不公平な主人にも(18 節)：

……善良で道理をわきまえた主人にだけでなく、不公平な主人にも従いなさい。([第一ペテロ 2 章 18 節](#)後半)

これは重要な但し書きです。雇用主から何らかのひどい扱いを受けていると、それを理由に「きちんと仕事をする」必要はなくなる、と考えたくなるものです。しかし聖書は、そうではないと教えています。私たちはイエス・キリストに対して責任を負っており、自分のしていることすべてが評価されなくても、さらには仕事をする中で非常にひどい扱いを受けていても、報酬を受けて行うべき仕事を、誠実に、また十分に果たす責任があります。上で「不公平な」と訳されているギリシヤ語の形容詞は skolios (スコリオス) で、文字どおりには「曲がった」という意味です(「scoliosis[脊柱側弯症]」参照)。これは「善良な」の反対を表しています。ここで「善良な」に使われているギリシヤ語 agathos (アガトス) は、単に道徳的に善良であるというだけでなく、「自分のすることにおいて優れている」という意味もあります。また skolios (スコリオス) は「道理をわきまえた」の反対でもあり、こちらの形容詞 epieikes (エピエイケース) はしばしば「寛容な、慈悲深い」という意味を持ちます。つまり、たとえ上司が自分の仕事において無能で、私たちの扱い方も気まぐれで、その結果として私たちに不公平であったとしても、それは私たちがいい加減な仕事をしてよい理由にはなりません——なぜなら、実際には私たちは主のために働いているからです([コロサイ 3 章 24 節](#); [エペソ 6 章 7 節](#)参照)から。そうである以上、たとえ受けているひどい扱いのためにそれが難しい場合でも、私たちは常に「主に対してするように」自分の仕事を行うよう努める必要があります。奴隷制度が存在しない(少なくとも違法である)現代の自由な(あるいは、ある程度自由な)国では、もし自分に降りかかる虐待に耐えることができない、あるいは耐えるつもりがないのであれば、別の仕事を探す権利があります。しかし、私たちには、自分をひどく扱

う人と同じところまで身を落とす権利も、自分の振る舞いが、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストについての証しであることを忘れる権利ありません。この国である程度人生経験のある人なら、たいてい「ひどい上司」のもとで働いた経験があるでしょう。私たちが常に、そして特にそのような過酷な主人のもとで働いている時に心に留めておかねばならないのは、イエス・キリストこそ私たちの真の「主人」であり、何よりもまず、この方を喜ばせることこそ私たちが努めていることだということです。

(9) 主人たちよ、あなたがたも同じように彼らを扱い、脅すことをやめなさい。あなたがた自身の主人も天におられ、その方にはえこひいきがないことを知っているからである。(エペソ 6 章 9 節)

ここで指摘しておくことが重要なのは、上の節が示しているように、雇用主、そして実際、監督する権限を持つすべての人も同様に、主に対して責任を負っており、自分の下で働くすべての人を、職場で権威の下にあるすべてのクリスチャンに求められているのと同じ良識と職業人としての誠実さをもって扱う義務があるということです。不信者がこの基準に従うこともあれば、従わないこともあります。経験から、従わない人が多いことを私たちは知っています。続く節でのペテロの議論は、この点について私たちに指針を与えてくれます。しかし同時に、ここで言うひどい扱いとは、法律上また道徳上許容される範囲を越えるようなものを意味していないことも明確にしておく必要があります。信者には、法律や規則に違反する扱いを受けた場合、会社や組織の管理上の仕組みの中で認められている手段を取る権利があります。そして、その行為が一線を越えて違法なもの、さらには犯罪にまで至る場合、ここでペテロが御霊によって語っていることは何一つ、信者が、前者の場合には法律の専門家に相談し、後者の場合には警察などの法執行機関に連絡することを禁じてはいません。モーセの律法でさえ、このような場合について定めています。

(26) 「もし人が、自分の男奴隷または女奴隷の目を打って、その目を損なったなら、その目の償いとして、その者を自由にしなければならない。(27) また、自分の男奴隷または女奴隷の歯を打ち抜いたなら、その歯の償いとして、その者を自由にしなければならない。」(出エジプト 21 章 26-27 節)

不当な苦しみを受けても耐え忍ぶ(19-20 節)：

(19) なぜなら、神に対する[清い]良心のゆえに、不当に苦しめられて苦難を受けても耐え忍ぶなら、それは[神の御前に]喜ばれることだからである。(20) しかし、罪を犯したために罰を受け、それを耐え忍んだからといって、何の誉れがあ

るだろうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。(第一ペテロ 2 章 19-20 節)

不当な扱いを耐え忍ぶことが私たちの主イエス・キリストを喜ばせると知ることは、どのような状況にあっても職場で正しいことを行うための、すばらしい動機となるはずです。実際、多少にかかわらず、自分がひどい扱いを受けている状況に置かれたなら、まさにそのような時こそ、この聖句——聖霊から与えられたこの真理——をしっかりと心に留めておくことが、なおさら重要です。というのも、自分がひどい扱いを受けていると感じる時、いや、もっと正確に言えば、実際にひどい扱いを受けている時こそ、弱い人間である私たちは、自分をひどく扱う人々に腹を立てて(その結果、神にかなわない仕方で過剰に反応して)しまったり、その状況にひどく落ち込んで(その結果、本来すべき仕事を十分に果たせなくなって)しまったり、さらには(まるで何らかの意味で神に責任があるかのように)神に対して腹を立ててしまったりしがちだからです。これらは、霊的に進んだ信者でさえ、そのようなサタンからの不意打ちに遭った時に陥りやすい、よくある過ちです。

上の第一の過ちは、「モーセの過ち」と呼ぶことができるでしょう。次の世代のイスラエル人が、あまりにもその父祖たちを思い起こさせるような仕方でまたも失敗したことにより立ったモーセは、怒りのあまり過剰に反応し、主から与えられた非常に明確な指示に従いませんでした(民数記 20 章 1-3 節)。モーセのような偉大な人物でさえ、完全な「主人」のもとで仕えていたにもかかわらず、そのようなことをしてしまったのですから、私たちの上司が完全でないばかりか、明らかに不当な扱いを実際に私たちにしている時、腹を立てそうになること自体は無理もないことです。そのような時には、私たちが本当はだれのために働いているのか、すなわち私たちの主イエス・キリストのために働いていること、そして、主が私たちを遣わされるすべての人々に対して、私たちは主の使者であり、多くの場合、とりわけ職場で私たちの周囲にいるすべての人々に対してそうであることを覚えていなければなりません。このような問題に私たちがどう対応するかは、周囲のあらゆる人の目に留まります。もし私たちがそのような圧力の中でも神にかなった姿勢を保ち、怒った反応をせず、「主に対してするように」仕事を続けるなら、それは同僚たちの目にも、やがては上司の目にも留まるでしょう。そして、イエス・キリストは私たちが喜んでくださいます。

上の第二の過ちは、「エリヤの過ち」と呼ぶことができるでしょう。聖書に記録されている中でも最大級の霊的勝利を収めた後、エリヤはイゼベルから命を狙うとの脅しを受けて不意を突かれ、恐れに捕らわれて逃げ出し、主の預言者として与えられていた任務を放棄してしまいました(第一列王 19 章 1-18 節)。エリヤのような偉大な人物でさ

え、自分の真の「主人」が、自分に何か不都合なことが起こるのを決して許されないと知っているべきだったにもかかわらず、そのようなことをしてしまったのですから(実際、主は後にそのことを証明されました:[第二列王 1 章 10-12 節](#))、私たちが職場で深刻な虐待の対象となった時、落ち込み、あきらめたくなること自体は無理もないことです。そのような時には、私たちが本当に仕えている方が、私たちの命も、私たちを迫害している人々の命も含め、すべてのものを完全に御手のうちに治めておられることを思い起こす必要があります。もし私たちが苦しむことが主の御心であるなら、たとえその時にはその理由が分からなくても(そしておそらく分からないでしょうが)、そこには疑いなく正しい理由があります(ヨブの場合のように)。ですから、そのような苦難が降りかかってきた時に絶望するのではなく、主が私たちと共におられることを思い起こして、主にあって自分自身を励ますよう努めなければなりません。そして、あらゆるひどい扱いにもかかわらず、主を敬うにふさわしい振る舞いを続け、神にかなった仕方主の救いを待ち望みさえすれば、主は私たちをこの苦難の海の中を、足を濡らすことなく渡らせてくださるのです。

上の第三の過ちは、「ヨナの過ち」と呼ぶことができるでしょう。後にヨナが怒りを表したことから、彼がタルシシへ逃げた動機は、イスラエルの最大の敵に味方して介入された主のなさり方を不満に思ったことにあったと分かります([ヨナ 4 章 1-4 節](#))。一般の人々が、そして時には信者でさえも、苦難が降りかかってきた時、神を信頼する代わりに神を責めることは珍しくありません。恐れていたことや忌み嫌っていたことが実際に起こると、「どうして神はこんなことが起こるのを許されたのか」という、きわめて不遜な問いを発するのが、よくある否定的な反応です。実際、神を信頼せず、その完全なご性質を敬わないというこの誤った反応を極端にまで押し進めることは、背教、すなわちキリストへの信仰を完全に捨て去ることの大きな原因の一つです([マタイ 13 章 21 節](#); [マルコ 4 章 17 節](#); [ルカ 8 章 13 節](#))。最初の二つの過ちは、残念なことではあっても、ある程度理解できるものです。しかし、神を責めることには、決して何の言い訳もありません。それは、この世でこれまで起こったこと、またこれから起こることすべてを根本的に読み違えることであり、神にかなった見方から最も遠く離れた、悪魔的な見方です。そしてそれは、真理の最も基本的な原則を理解していないということです。すなわち、神は私たちを愛しておられ、キリストの血によって清められた私たち信者の益のために、すべてのことをしてこられ、今もしておられ、**すべてのことを共に働かせて私たちの益と**してくださっているのです([ローマ 8 章 28 節](#))。というのも、続く節でペテロが私たちに思い起こさせるように、父なる神は私たちを火の池から救うために、ご自身の愛する御子を犠牲にされ、私たちの主イエスは、私たちの罪の一つ一つについて、その火のような代価を支払うために、カルバリの十字架の暗闇の中で死なれたからです。**それこそ**が愛です——そして、ただ私たちの益だけを願っておられる方を責めることは、私たち

のこの大いなる救いを忘れ、それを神の御顔に投げ返すことなのです。

上に挙げた三つの歴史的な事例では、いずれの場合も、その失敗には結果が伴いました。しかし三人とも、この偉大な神の人たちには、その失敗を挽回する機会が与えられました。ヨナはその時、奇跡的な仕方で海から連れ戻され、その後、多くのアッシリア人を救いへと導きました。そしてモーセとエリヤは、艱難期に死者の中からよみがえらされてイスラエルへ戻り、多くのユダヤ人の大いなる霊的復興を指導することになります。それでも、そもそもそのような過ちを犯さない方がよかったことは、だれの目にも明らかではないでしょうか。ですから、私たちは主の大いなるあわれみと赦しを喜び、主のものとしてとどまる決意があるなら、主が私たちを赦し、救い出してくださるとの確信を持つ一方で、怒ったり、落ち込んだり、主を責めたりする代わりに、圧力の下でもしっかりと踏みとどまり、主が私たちに望んでおられること、すなわち、私たちは主を代表しているのですから、主を敬うような良い仕事を続ける時、主は「喜ばれる」のです。もし私たちが「不当な扱いを受けた」ために誤った反応をして苦しむのではなく、「正しいことを行った」ために苦しむのであれば、そうすることによって私たちの愛する救い主に栄光を帰し、その結果、主を喜ばせることになるのです。

ここで触れておかなければならないのは、職場でひどい扱いを受けても耐え忍ぶことと、**実際の不正行為のために科される処罰、叱責、降格、減給などを受けること**とは同じではないということです。ですからペテロは、「**罪を犯したために罰を受け、それを耐え忍んだから**といって、何の誉れがあるだろうか」と問いかける形で述べています。もし私たちが怠けたり、仕事をおろそかにしたり、その他の仕方で雇用主の妥当な期待に応えることを怠ったのであれば、そのような仕事ぶりから当然生じる結果は、ペテロがこの箇所で説明している「不当に受ける苦しみ」ではありません。むしろそれは、私たちの責任——人間の雇用主に対する責任——であると同時に、主に対する責任でもあるもの——に対する怠慢な態度が招いた当然の報いなのです。

しかし、私たちに怠慢の罪がなく、それにもかかわらずひどい扱いを受けるなら（これは、ここで述べられているように十分起こり得ることであり、私たちの多く、もしかするとほとんどの者が経験するほど珍しくないことです）、私たちは、自分が確かに「神に対する[清い]良心のゆえに」（19 節）行動していること、そして、私たちが耐えている不当な苦しみに対するこのような応答が、その結果として「[神の御前に]喜ばれる」ものであることを知って、心を強くすることができます。結局のところ、救われた後も私たちがこの世にとどまっている唯一の理由は、まさにこれなのです。すなわち、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが私たちに望んでおられることを行って、主を喜ばせるためです。

受け入れがたい扱いが、組織の規則に違反する、あるいは違法となる一線を越えた場合には、正当な手段を取ることが正当であることは、すでに述べました。しかし、そうでない場合、キリストのために耐え忍ぶことは臆病ではありません。実際、何らかの仕方ですら仕返しをするよりも、耐え忍ぶ方が、はるかに大きな勇気を必要とすることがしばしばあります。

最後に、ひどい扱いには、もっと間接的な形のものもあります。たとえば、非常に良い仕事をして組織に大きく貢献し、危機の際には窮地を救うほどの働きをしている人が、経営側から正当に評価されない一方で、それほど貢献していない人——場合によっては、むしろ問題を引き起こしている人——が評価され、称賛されることがあります。そのような状況が、えこひいき、無能、あるいは単なる見落としのいずれによるものであっても、私たちクリスチャンは、真に重要な**唯一の**誉れは、私たちの愛する主イエス・キリストの栄光であり、主が私たちを喜んでくださることは、この世のあらゆる榮譽をすべて合わせたものよりも価値があることを、常に覚えておく必要があります。

しかし、罪を犯したために罰を受け、それを耐え忍んだからといって、何の誉れがあるだろうか。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。[\(第一ペテロ 2 章 19-20 節\)](#)

このために召された(21 節)：

(21) 実に、あなたがたが召されたのは、このためである(すなわち、キリストの苦しみにあずかるためである)。キリストもまた、あなたがたのために死なれ、あなたがたがその足跡に従うように模範を残されたからである。(22) 「彼は罪を犯さず、その口には何の欺きも見いだされなかった」([イザヤ 53 章 9 節後半](#))。(23) キリストは、そしられても、そしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にご自身をゆだねられた。[\(第一ペテロ 2 章 21-23 節\)](#)

イエス・キリストのために苦しむことは、偶然に起こることではありません。むしろ、上の節が宣言しているように、それはクリスチャンであることの本質的な一部です。「あなたがたが召されたのは、このため」なのです。

(10) 「義のために迫害されている者は幸いである。天の御国はその人たちのものだからである。(11) わたしのために、人々があなたがたをののしり、迫害し、偽ってあらゆる悪口をあなたがたに浴びせる時、あなたがたは幸いである。

(12) 喜び、大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからである。あなたがたより前の預言者たちも、そのように迫害されたのである。」([マタイ 5 章 10-12 節](#))

あなたがたは、キリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことをも恵みとして与えられている。([ペリピ 1 章 29 節](#))

実に、キリスト・イエスにあって神にかなった生活をしようと願う者はみな、迫害を受ける。([第二テモテ 3 章 12 節](#))

もしキリストの名のためにそしられるなら、あなたがたは幸いである。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである。([第一ペテロ 4 章 14 節](#))

この「苦しみへの召し」が私たちに与えられているのは、私たちがしっかりと耐え忍ぶ姿が、ほかの人々への証しとなるからです。それによって、(1) その苦しみの中で私たちを支える真理の力、(2) その苦しみを通り抜けさせてくださる神の真実さ、そして (3) この世で一時的に苦しみを免れたり、つかの間の利益を得たりすることよりも、主に認めていただくことを私たちが選んでいるということが、彼らに示されます。私たちが待ち望んでいるのは、「この世のものではない」御国であり([ヨハネ 18 章 36 節](#))、「その設計者また建設者は神である」都を求め([ヘブル 11 章 10 節](#))、「エジプトの宝」にまさる報いを待ち望み([ヘブル 11 章 26 節](#))、この世における一時的な祝福や苦しみからの解放よりも「さらにまさった」復活を待ち望んでいるのです([ヘブル 11 章 35 節](#))。どのような苦しみであれ——職場で不公平で不当な扱いを受けることも、確かにその一つですが——それを神にかなった仕方で耐え忍ぶ時、私たちは、イエス・キリストと、主が私たちをどう見ておられるかということが、この世の何ものよりもはるかに重要であること、そして、神を顧みなかったエサウがしたように、天における報いを地上の「一杯の食物」と引き換えにするつもりなど決してないことを示しているのです。このように、肉体的、この世的なあらゆる損得勘定に逆らう姿勢は、単なる言葉よりもはるかにはっきりと、私たちの信仰が困難に耐え得るものであり、本物であることを示します。そして、私たちの模範を見るすべての人にとって、私たちが仕えている、目には見えなくても常に真実であられる神を力強く目に見える形で証しするものとなるのです。

(27) ただ、あなたがたの生活をキリストの福音にふさわしいものとしなさい。それは、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、一つの霊にあって堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために

共に戦い、(28) どんなことがあっても敵対する者たちにおびえることがない、と聞くためである。このことは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしであって、それは神から出たものである。(ピリピ 1 章 27-28 節)

不当な扱いを受けた時に私たちがどのように振る舞うべきか、その究極の模範は、ほかならぬ私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストと、主が十字架に至るまでに耐え忍ばれた苦しみです。主は私たちのために死なれ、その血(私たちの罪のための犠牲)によって私たちを買い取ってくださったのですから、私たちにできるせめものことは、主が望んでおられるとおり、主が残してくださった模範に従うことです。そして今、私たちは主に属しているのですから、悪しき者とその邪悪なこの世の体制が、当然のように私たちを憎み、敵対しようとするのも道理にかなっています。

(18)「世があなたがたを憎むなら、あなたがたより先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。(19) もしあなたがたが世に属していたなら、世は自分のものを愛したであろう。しかし、あなたがたは世に属しておらず、わたしがあなたがたを世から選び出したので、そのために世はあなたがたを憎むのである。(20) わたしがあなたがたに教えたこの原則を覚えておきなさい。しもべはその主人にまさるものではない。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。」(ヨハネ 15 章 18-20 節)

ここで急いで付け加えておかなければならないのは、私たちが耐えるよう求められるどのような苦しみも、主が私たちのために耐えられた最も小さな苦しみとさえ比べることはできないということです。まして、私たちの罪のために死なれた十字架上の主の犠牲は、言葉では言い表せず、何ものとも比較できないものであり、そのほんの一部でさえ、今存在するもの、またこれから存在するものすべてを合わせたものよりも偉大です。それでも聖書は、私たちが「キリストの苦しみにあずかる」ことについて語っています。それは、あの暗闇が訪れる前に主が直面されたすべてのことを勇敢に耐え忍ばれた、その姿にならうということです。そして、ペテロがここで述べているのは、まさにこの原則です(ローマ 8 章 17 節; 第二コリント 1 章 5 節; ピリピ 1 章 29-30 節, 3 章 10 節; コロサイ 1 章 24 節; 第一ペテロ 4 章 12-13 節; 黙示録 1 章 9 節; マルコ 10 章 38-39 節; 使徒行伝 5 章 41 節; 第二コリント 4 章 10-11 節; ガラテヤ 6 章 17 節; 第一テサロニケ 1 章 6 節; 第二テサロニケ 1 章 4-5 節; 第二テモテ 3 章 12 節参照)。すなわち、苦しみを神にかなった仕方で耐え忍ぶことによって、人間と天使の世界の双方に、私たちの信仰と忠実さを示すことです。「あなたがたが召されたのは、このため」なのです(第一ペテロ 2 章 21 節)……

[彼らは]弟子たちの心を強め、信仰にとどまるよう励まして、「私たちは多くの苦難を経て、神の御国に入らなければならない」と言った。(使徒行伝 14 章 22 節)

実際、私たちがあなたがたと共にいた時、私たち[すべてのクリスチャン]は苦難を受けるよう定められていると、私はあらかじめあなたがたに告げていた。(第一テサロニケ 3 章 4 節)

……私たちを買い取ってくださった主を代表する者として。

(3) 罪深い人々の手によって、ご自身に向けられたあれほど激しい敵対を耐え忍ばれた方、[私たちの主イエス・キリスト]のことを心に留めなさい。それは、あなたがたが心に疲れ果て、あきらめてしまわないためである。(ヘブル 12 章 3 節)

(11) この言葉は真実である。もし私たちが彼と共に死んだなら、彼と共に生きるようになる。(12) もし私たちが[苦しみと試練の中で]耐え忍ぶなら、彼と共に支配するようになる。もし私たちが彼を否むなら、彼もまた私たちを否まれる。(13) たとえ私たちが不真実であっても、彼は常に真実であられる。彼はご自身を否むことができないからである。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

あらゆることにおいて、そしてとりわけ不当な扱いを耐え忍ぶことにおいて、私たちのために死なれた主の模範に従うことは、クリスチャン生活の根本です。近年よく使われる「イエスならどうするだろうか?」という言葉は、的を射ていません。私たちはイエスではありませんし、主が直面されたことと同じものに直面しているわけでもまったくありません(特に、世の罪のために死ぬということに関してはそうです)。むしろ私たちは常に、「イエスは私に何をしよう望んでおられるのか?」と自分に問い、それを行うべきなのです。私たちを贖ってくださった方、すなわち、その血という代価、ご自身の十字架の上での霊的な死によって、私たちのすべての罪のために代価を払い、罪と死から私たちに自由にするために買い取ってくださった方として、私たちの主には確かに、私たちにこのこと、すなわち主に栄光を帰す仕方ではひどい扱いを耐え忍ぶことを求める権利があります。私たちは主にすべてを負っており、この世において、主に喜んでいただくことほど価値のあるものは何一つありません。

「主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべよ。あなたはわずかなも

のに忠実であったから、多くのものを任せよう。主人の喜びを共に喜んでくれ。』(マタイ 25 章 21 節/NIV 訳)

不当に受ける苦しみという試練を首尾よく乗り越えることは、霊的に未熟な者にできることではありません。特に困難な状況の中で耐え抜くためには、私たちの主を深く知っていることが必要です。そのためには、心の中に真理を十分に蓄え、それを信じてしっかりと保ち、人生の嵐が起こった時に、御霊がいつでもそれを用いることができるよう備えておく必要があります。聖書は「キリストの思い」ですから(第一コリント 2 章 16 節)、主が私たちに何を望んでおられるのかを知るためには、まず、主が真理の御言葉の中で私たちに与えてくださったすべてのことに心を向けなければなりません。そうして初めて、この聖書箇所に含まれている、明示されているものも暗に示されているものも含めた命令を、実際に正しく行うことができるようになります。したがって、ここで与えられている命令を果たすためには、霊的成熟が不可欠な前提条件なのです。私たちの主は、この原則を完全な形で示してくださいました。主は地上での生涯を通して、聖書の真理のすべてを完全に学び、それを実際に適用されたからです(たとえば、悪魔を退けるために聖書を用いられたことを参照: マタイ 4 章 1-11 節; ルカ 4 章 1-13 節)。私たちはクリスチャンとしての歩みにおいて、決して主と同じ完全な境地に達することはできませんが、それでも、それこそが少なくとも私たちに与えられている目標です。なぜなら、ここで私たちが従うよう明確に命じられているのは、まさに主の模範だからです。

それゆえ、キリストが肉において苦しみを受けられたのですから、私たちも同じ心構えをもって自らを武装すべきです。[イエスがそうされたように]肉において苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを断ったのだと[考えなさい]。(第一ペテロ 4 章 1 節)

私たちの主が「罪を犯されなかった」ように、それにならって、私たちも罪深いものすべてから離れなければなりません。そして成長するにつれて、ますますそうしていかなければなりません——故意であれ、そうでないものであれ、自分の過ちに気づいたなら直ちに悔い改め、できるだけ早くすべての罪を告白して、正しい道に戻るよう努めるのです。これは特に、ここで扱われているひどい扱いを耐え忍ぶという文脈における、心の罪や舌の罪について当てはまります。そのような状況では、言葉で仕返しをしたという誘惑が非常に強いことは明らかなからです。ペテロがキリストの模範を示す際に特に取り上げているのは、主がご自分に浴びせられた中傷に対して中傷で仕返しをせず、また、ご自分を虐待していた者たちを脅すこともしなかったということです。奴隷という状況において——そして雇用主のもとで働くという状況においても——使徒がこ

の問題を取り上げるのは非常に適切なことです。たとえばヤコブの手紙からも([ヤコブ 3 章 2-12 節](#); [1 章 19 節](#)参照)、また私たち自身の経験からも、言葉による罪は、避けることが最も難しい過ちの一つであることが分かります。

(1b) 私は言った。「私は自分の道に気をつけ、舌で罪を犯さないようにしよう。悪しき者が私の前にいる間は、口にくつわをかけておこう。」(2) そこで私はまったく黙り、良いことさえ口にしなかった。しかし、私の苦しみは増し加わった。(3) 私の心は内に熱くなり、思い巡らすうちに火が燃え上がった。そこで私は舌をもって語った。(詩篇 39 篇 1-3 節/NIV 訳)

自分に悪いことをしたと思う相手に「仕返しをして帳尻を合わせたい」という誘惑は、気づきにくいものでありながら、しばしば非常に強いものです。そのため、たとえ上司に面と向かって不満をぶつけることは抑えられたとしても、自分の不満を同僚と「分かち合い」、上司をかなり悪く見えるように語りたくなる誘惑に駆られることがよくあります。このような中傷は、部下が上からの横暴な扱いに対して「仕返し」をしたり、「自分を守ったり」する典型的な方法です。またこれは非常に欺瞞的でもあります。何をどのように言うかによっては、それが罪であるようには思えないこともあるからです。しかし、たとえ私たちの言うことが明らかな嘘ではなくても、その動機や具体的な言葉の選び方によっては、ほかの人について否定的なことを口にする時、私たちは常に中傷の罪を犯す危険があります——そして、とりわけ私たちを直接監督する権威の立場にある人について語る場合にはそうです。まったく何も言わずにいるという基準を自分に課し、それを守ることは容易ではありません(すぐ上に引用した詩篇の箇所が示しているとおりです)。しかし信者は、自分から見て職場でひどい扱いを受けているどのような状況にあっても、中傷を避けるという原則と、中傷を控えられた私たちの主の模範を心に留めておく必要があります(もし中傷を言い返す理由があった人がいるとすれば、確かに主こそそうでした)。

そして、このように自分で自分の正当性を証明しようとするやり方には、もう一つ問題があります。クリスチャンは主を信頼し、主が解決してくださるのを待ち、自分を救い出していただくことを主の御手にゆだねるべきであって、自分の手で解決しようとするべきではありません。しかし、もし私たちが中傷に加わり、さらに一歩進んで、自分を虐げていると感じる相手を失脚させるために、何らかの欺きや策略、あるいは職場内の駆け引きに手を染めるなら、その問題を主の御手から取り上げて、再び自分の手に取り戻したことになります。そのような行動の結果が、主を信頼して忍耐強く待った場合ほど祝福されたものになることは決してありません。

クリスチャンは、主を信頼する時には物事は常により良い方向へ進み、それとは反対に、自分自身の努力を頼りにする時には常に悪い方向へ進むということを心に留めておく必要があります。ですから、傷つけられたと感じることがまったくなくなり、自分の受けた扱いについて一切不平を言わなくなるところまで到達できると考えるのは現実的ではありませんが、侮辱や不当な扱いを受け流すことが多くなり、不平を言うことが少なくなればなるほど、霊的な観点から見て、あらゆる面で私たちの益となります。結局のところ、このより良い道こそ、私たちの主が常に取られた道であり、主こそ私たちが従うべき模範なのです。

知恵ある者の舌は知識を正しく用いる。しかし、愚かな者の口は愚かさを吐き出す。[\(箴言 15 章 2 節\)](#)/NKJV 訳)

主がご自分を迫害する者たちを脅したいという誘惑を受けられた時、その誘惑は非常に大きなものであったに違いありません。彼らを造られたのは主なのです！ しかも主は、まさに彼らの罪のためにも死のうとしておられたのです！ そして、彼らをさばかれる方も主なのです！ それでも主は、その誘惑に屈されませんでした。私たちが脅しの言葉を口にしたくなるなどのような誘惑を経験するとしても、それが主の耐えられたものほど大きなものであることは決してありません。そして、私たちが耐えるよう求められるどのようなひどい扱いの中にあっても、さばき主ご自身が私たちと共にいてくださることを、私たちは知っています。自分の正当性を示すために、私たち自身が相手に加えることのできるどのような報復も——あるいは、加えると脅すことのできるどのような報復も——主がご自分の聖徒に手をかける者たちに下すことのできる、また実際に下される正しいさばきと、私たちのためになされる弁護には、到底及びません。そのような時には、仕返しをしようとするのではなく、「善を行いつつ、真実な創造者に自分の命をゆだねる」ことを心がける必要があります。[\(第一ペテロ 4 章 19 節\)](#)。

「どうか主が私とあなたとの間をさばき、裁定してくださいますように。主が私の訴えをご覧になり、これを取り上げ、あなたの手から私を救い出して、私の正しさを明らかにしてくださいますように。」[\(第一サムエル 24 章 15 節\)](#)

神よ、私をさばき、神を敬わない民を相手に、私の訴えを弁護してください。欺きと不正を行う者から、どうか私を救い出してください。[\(詩篇 43 篇 1 節; 参照: 7 篇 8 節, 26 篇 1 節, 35 篇 24 節, 54 篇 1 節, 138 篇 8 節\)](#)

結局のところ、君主たちを信頼するよりも主を信頼する方がよいのですから[\(詩篇 118 篇 9 節\)](#)、まして、力のない自分自身を頼りにするよりも、主を信頼する方がはるか

によいのです。私たちにはほとんど何もできないことがしばしばあります(特に、上司からひどい扱いを受けている場合にはそうです)。しかし、主におできにならないことは何一つありません。

「見よ、わたしは主、すべての肉なる者の神である。わたしにとって、できないことが何かあるだろうか。」([エレミヤ 32 章 27 節](#)/NIV 訳)

これは、私たち信者が、されるがままにならなければならないという意味ではありません。サウルに命を狙われた時、ダビデは荒野へ逃れました。しかし、主に油注がれた者に決して手をかけないよう常に注意し、その代わり、しかるべき時に主が自分の正しさを明らかにしてくださることを信頼しました。同じように、私たちも転職しなければならないことがあるかもしれません。また、受けているひどい扱いが、法律上、あるいはその組織の方針から見て合理的に許容できる範囲を越えている場合には、組織の内外にある正当な手段を利用する必要があるかもしれません。しかし、どのような場合でも、たとえ何らかの行動を取らざるを得ないとしても、できる限り物事を主の御手にゆだねることが、信者にとって賢明です。そしてどのような場合にも、言葉で仕返しをすることは慎むのが賢明です——それは、私たちに不当なことをする者たちを恐れているからではありません……そうではなく、私たちを救い出してくださると信頼している方を恐れているからです。

(25) 主は、ご自分を信頼する者、ご自分を求める者にいつくしみ深い。(26) 主からの救いを静かに待つことは良いことである。([哀歌 3 章 25-26 節](#))

実のところ、ここでの鍵はこれです——そしてこれは、クリスチャン生活のすべてに通じる鍵でもあります。たとえ自分が直面していることが、まったく不公平で、ひどく、とても耐えられないように思える時であっても、神が私たちのために物事を良いように取り計らってくださると信頼することを、私たちは学ばなければなりません。

そして、神を愛する者たち、すなわち、神のご計画に従って召された者たちのためには、神がすべてのことを共に働かせて益としてくださることを、私たちは知っている。([ローマ 8 章 28 節](#))

神のご計画には、すべてのことがあらかじめ考慮されています。自分の力ではどうすることもできない問題に直面した時こそ、それを主の御手にゆだね、主が私たちを救い出してくださるまで、そこにゆだねたままにしておくことが最も大切なのです。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は正しい者が揺るがされることを決して許されない。(詩篇 55 篇 22 節/NIV 訳)

時には、私たちは自分の力ではどうすることもできないのだと認め(それが何であれ)、主を待ち望むことを決意しなければなりません。私たちは「自分の力の及ばない大きなこと」に心を向けてはならず(詩篇 131 篇 1 節)、自分で自分の正しさを証明し、自分を正当化しようとしてはなりません。むしろ、それがありそうにもない、あるいは不可能に思える時でさえ——いや、とりわけそう思える時にこそ——主がそのことを私たちの益となるように取り計らってくださると信頼しなければなりません。なぜなら、私たちは、神がすべてをご覧になっておられ、常に正しく義にかなった仕方でのみさばかれることを知っているからです——少なくとも、知っているべきなのです。ヨブのように、もし私たちが本当に不当な苦しみを受けているのなら、それは「これが神の御心」であるからにはほかならないことを理解しなければなりません(第一ペテロ 2 章 15 節)。たとえ私たちにはその理由が分からなくても、私たちの愛する主イエス・キリストは、ご自分が何を、なぜしておられるのかを完全にご存じであることを、決して疑ってはなりません。主に従う者である私たちの務めは、「なぜなのか」と問いただくのではなく、疑わずに主を信頼することです。もし私たちがこの聖書的な姿勢を取るなら、最終的に失望することは決してありません——たとえ、その救いが実現するまで待たなければならないとしても(そして実際、私たちはしばしば待たなければなりません)。

(9) そこでサタンは主に答えて言った。「ヨブは何の理由もなく神を恐れているのでしょうか。(10) あなたは彼とその家と、彼のすべての持ち物との周りに、あらゆる方面から垣を巡らされたではありませんか。あなたは彼の手のわざを祝福されたので、その家畜は地に増え広がっています。(11) しかし今、あなたの手を伸ばして、彼の持っているすべてのものに触れてみてください。彼はきつと、あなたの面前であなただけをのろうでしょう。」(ヨブ 1 章 9-11 節/NKJV 訳)

(4)そこでサタンは主に答えて言った。「皮には皮を！ 人は自分の命のためなら、持っているものすべてを差し出します。(5)しかし今、あなたの手を伸ばして、彼の骨と肉に触れてみてください。彼はきつと、あなたの面前であなただけをのろうでしょう。」(ヨブ 2 章 4-5 節/NKJV 訳)

私たちが深く関わっているこの宇宙的な戦いの性質を考えるなら、私たち信者が、悪しき者、その手下たち、そして彼が築き上げたこの世の体制と、それに従う者たちの手によって、困難や苦しみを受けることに何の不思議があるのでしょうか。実際のところ、私たちが今受けている以上に迫害されていないことの方が驚くべきことであり、それは

計り知れない神の恵みによるものなのです。

「わたしがあなたがたに教えたこの原則を覚えておきなさい。しもべはその主人にまさるものではない。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。」([ヨハネ 15 章 18-20 節](#))

私たちが主人である主に近づけば近づくほど、またこの世において実際に主の栄光をよりよく映し出すようになればなるほど、悪の勢力から望ましくない注意を向けられることも、ますます予期すべきこととなります。それは、私たちが深く関わっている目に見えない戦いの本質的な一面です。しかし、恐れおののくのではなく、私たちは「強く、また雄々しく」あることができます([申命記 31 章 6-7 節](#), [31 章 23 節](#); [ヨシュア 1 章 6-9 節](#), [1 章 18 節](#), [10 章 25 節](#); [第一歴代誌 22 章 13 節](#), [28 章 20 節](#); [第二歴代誌 32 章 7 節](#))。なぜなら、私たちは、だれよりも強い方により頼んでいるからです。そして、主に信頼し、信仰を置き、完全により頼む者たちには……

1) 私たちの試練と苦難の中には、**慰めと励まし**があります。

「この世では、あなたがたには苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは世に勝ったのである。」([ヨハネ 16 章 33 節](#))

(3) ほむべきかな、私たちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみの神、あらゆる励ましの神。(4) 神は、私たちがあらゆる苦難の中にある時に私たちを励ましてくださる。それは、私たち自身が神から受けたその励ましによって、私たちもまた、あらゆる種類の苦難の中にある人々を励ますことができるためである。(5) なぜなら、あなたがたに仕える中で、キリストのために受ける私たちの苦しみが増し加わったように、キリストを通して私たちが受ける励ましも、それと同じほど豊かに増し加わったからである。(6) もし私たちが苦難を受けているなら、それはあなたがたの励ましと救いのためである。また、もし私たちが励まされているなら、それはあなたがたが受けた励ましのためであり、その励ましは今、私たちも経験した同じ苦しみをあなたがたが首尾よく耐え忍ぶ中で働いている。(7) こうして、あなたがたに対する私たちの希望は確かなものである。なぜなら、あなたがたが苦しみにあずかる者となったように、同じように励ましにもあずかる者となることを知っているからである。([第二コリント 1 章 3-7 節](#))

もしあなたがたがキリストの名のためにそしられているのなら、あなたがたは本当に幸いである。(その試練の中であなたがたを支えるために) 栄光の御霊、す

なわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである。(第一ペテロ 4 章 14 節)

2) 私たちの試練と苦難からは、**救出と解放**があります。

(9) 主は虐げられた者の避け所、苦難の時の砦である。(10) 御名を知る者はあなたに信頼する。主よ、あなたは、ご自分を求める者を決して見捨てられなかったからである。(詩篇 9 篇 9-10 節)

しかし、神は貧しい者を決して忘れられない。苦しむ者の望みが永遠に失われることはない。(詩篇 9 篇 18 節)

(35) 何が私たちをキリストの愛から引き離すだろうか。苦難か、困窮か、迫害か、飢えか、貧しさか、危険か、暴力か。(36) 「あなたのために、私たちは一日中、死に渡されている。ほふられる羊のようにみなされた」と書いてあるとおりである。(37) しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、私たちを[そのようにしてくださるほど]愛してくださった方によって、圧倒的な勝利を得ている。(38) 私は確信している。死も命も、天使の権威も人間の権威も、現在のものも将来のもものも、天にある力も、(39) [選ばれた者の]最も高いものも、[墮落した者の]最も低いものも、また[この地上の]ほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできない。(ローマ 8 章 35-39 節)

あなたがたが受けた試練で、人間が普通に経験する範囲を超えるものはない。神は真実である。あなたがたの耐えられる限度を越えて試練を受けることを許さず、その試練と共に、あなたがたが耐え抜くことのできるように、逃れる道も備えてくださる。(第一コリント 10 章 13 節)

(7) しかし、私たちはこの宝を土の器の中に持っている。それは、このすぐれた力が私たちからではなく、神から出たものであることが明らかになるためである。(8) 私たちは四方から圧迫されても、押しつぶされず、途方に暮れても、絶望せず、(9) 迫害されても、見捨てられず、打ち倒されても、滅ぼされない。(第二コリント 4 章 7-9 節)

(6) この究極的な救い(すなわち、復活と報い)を待ち望んで、あなたがたは喜びにあふれている。今しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことになっ

ているとしても、(7) それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。(第一ペテロ 1 章 6-7 節前半)

ですから、私たちは試練と苦難の中で、平安という正しい心の姿勢を保つよう注意する必要があります。今、受けることのできる慰めに心を向けると同時に、信仰によって必ず来ると知っている救いを、積極的に待ち望むのです。

あなたは、心をあなたに据えている者を、完全な平安(文字どおりには「二重の平安」)のうちに守られる。その人があなたに信頼しているからである。(イザヤ 26 章 3 節)

主なる神、イスラエルの聖なる方はこう言われる。「立ち返って安らぐことに、あなたがたの救いがあり、静かにして信頼することに、あなたがたの力がある。しかし、あなたがたはそれを望まなかった。」(イザヤ 30 章 15 節)

(9) したがって、神の民のためには、なお「安息日の休み」が残されている。
(10) 神の安息に入った者は、神がご自身のわざを休まれたように、自分自身もそのわざを休んだからである。(11) それゆえ、私たちはその[絶え間ない霊的な]安息に入るよう熱心に努めよう。だれも[出エジプトの世代がした]同じ不従順の例にならって[恵みから]落ちることがないためである。(ヘブル 4 章 9-11 節)

(6) この究極的な救いを待ち望んで、あなたがたは喜びにあふれている。今しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことになっているとしても、(7) それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。この信仰が本物であると証明されることは、金よりもはるかに価値がある。金もまた火によって試されるが、やがて滅びる。しかし、人生というつぼの中であなたがたの信仰が本物であると証明されるなら、それはイエス・キリストが栄光のうちに現れる時、あなたがたにとって称賛と栄光と誉れをもたらすのである。(第一ペテロ 1 章 6-7 節)

3) ですから、私たちは試練や苦難の中にあって、平安という正しい心の姿勢を保つよう注意する必要があります。今、私たちが受けることのできる慰めに心を向けるとともに、信仰によって必ず来ると知っている救いを、積極的に待ち望むのです。

あなたは、心をあなたにとどめる者を、完全な平安(実際には「二重の平安」)

のうちに守られる。彼があなたに信頼しているからである。(イザヤ 26 章 3 節 /NKJV 訳)

主権者なる主、イスラエルの聖なる方は、こう言われる。「悔い改めと安息のうちに、あなたがたの救いがあり、静けさと信頼のうちに、あなたがたの力がある。しかし、あなたがたはそれを望まなかった。」(イザヤ 30 章 15 節 /NIV 訳)

(9) それゆえ、神の民のためには、なお「安息日の休み」が残されている。(10) なぜなら、[神の]安息に入った者は、神がご自身のわざを休まれたように、自分自身もそのわざを休んだからである。(11) それゆえ、私たちは、その[絶え間ない霊的な]安息に入るよう熱心に努めようではないか。だれも、[出エジプトの世代がそうであったように]同じ不従順の例にならって[恵みから]落ちることのないためである。(ヘブル 4 章 9-11 節)

(6) この究極的な救いを待ち望みつつ、あなたがたの喜びはあふれている。今しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことが、あなたがたに定められているとしても、(7) それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。あなたがたの信仰が本物であることが証明されることは、金よりもはるかに価値がある。金もまた火によって試されるが、やがて滅びるものである。しかし、あなたがたの信仰は、人生というつぼの中で試され、本物であることが証明される時、イエス・キリストの栄光ある再臨において、あなたがたに賛美と栄光と誉れをもたらすことになる。(第一ペテロ 1 章 6-7 節)

私たち信者が神によって「このために」召されたのである以上、すなわち、キリストの苦しみにあずかり、主が十字架の前に耐えなければならなかった苦しみと、ごくわずかながらも似たさまざまな試練や苦難を神にかなった仕方で耐え忍ぶことによって、この世に主を証しするために召されたのである以上、クリスチャンは、イエス・キリストに属していることによって与えられている平安を、決して手放してはなりません。なぜなら、それこそが、周囲で荒波がどれほど激しく渦巻いていようと、私たちが保たなければならない基本的な心の姿勢だからです。そして、神の助けによってその平安を保つ時、私たちは心の中でそのようなあらゆる困難を乗り越え、間もなく来るすべての栄光への希望によって、平安から喜びへと進んでいくことができます。

(2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に遭う時には、喜ぶよう努めなさい。(3) あなたがたの信仰が試されることによって忍耐が生み出されることを、心に留めておきなさい。(4) そして、その忍耐を十分に働かせなさい。それは、あなたがたが

十分に成熟し、十分な報いを受けるにふさわしい者となり、何一つ欠けたところのない者となるためである。(ヤコブ 1 章 2-4 節)

(12) 愛する者たちよ、あなたがたを試すために降りかかっている火のような試練を、何か異常なことが起こっているかのように驚いてはならない。(13) むしろ、あなたがたが[真に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、そのことを喜びなさい。それは、キリストが栄光のうちに現れられる時にも、大いなる喜びをもって喜ぶことができるためである。(第一ペテロ 4 章 12-13 節)

主が、ご自身を御父の御手に「ゆだねる」ことによって、想像を絶する苦しみを耐え抜くことがおできになったように(第一ペテロ 2 章 23 節)、私たちもまた、すべてを神の力強い御手にゆだね、神が私たちをそこから切り抜けさせてくださると信頼することを学ばなければなりません——なぜなら、その信仰と確信こそが、私たちの平安の土台だからです。どのような困難に直面しても、私たちはそれを祈りのうちに天の父に差し出し、「神が私たちを心にかけてくださっているので、すべての思い煩いを神にゆだね」(詩篇 55 篇 22 節; 第一ペテロ 5 章 7 節)、神が約束してくださったとおり、すべてのことを共に働かせて、完全に私たちの益としてくださると信頼するのです(ローマ 8 章 28 節)。神は完全に真実であられ、私たちを失望させたことは一度もありません——私たちが神の救いを待ち望むならば、ただの一度もありません。神は私たちのあらゆる信頼を受けるにふさわしい方です。神は、主イエスを、人間が経験し得る中で最も困難な数々の経験を通らせ、その先にある勝利へと導かれました。ですから、イエスは私たちの模範であり、私たちが「その足跡に従う」ことができるよう、私たちに手本を示してくださったのです(第一ペテロ 2 章 21 節)。実際に私たちをさばかれる方は、私たちの愛する主であり救い主イエス・キリストであって、私たちが目にしたり声を聞いたりするどのような人間でもありません。それは、たとえその人が、一時的に私たちに対して何らかの権力を持っているように見える者であっても同じです。私たちと私たちのさばき主との関係が正しいかぎり、どんな人間も、人間の法廷も、人間からの攻撃も、人間によるどのような評価も恐れる必要はありません……なぜなら、私たちが主の望まれる仕方で物事を行っているかぎり、主は私たちを救い出してくださるからです(詩篇 118 篇 6-9 節)。

あなたの重荷を主にゆだねよ。

主はあなたを支えてくださる。

主は正しい者が揺るがされることを、

決して許されない。(詩篇 55 篇 22 節)

